

## 国際金融機構の中心国の資格と条件

清 田 邦 弘

### 目 次

まえがき

A. 国際金融機構が運営されるための大前提条件

B. 中心国の資格と条件について

ア. 政治的安定と軍事的優位

イ. 経済的要因

1. 経済力の優位

2. 経済規模の優位

3. 各種市場の発達

4. 各種規制の緩和・撤廃

5. 妥当な経済政策

6. インフラストラクチャーの整備

7. 自然条件について

8. 中心国の国民性について

9. 通貨の問題

C. 周辺国の協力

あとがき

### ま え が き

国際間の決済や貸借（投資を含む）を，世界のある特定国の通貨を国際通貨として用い，その国で集中的に行われる国際信用機構について，それがうまく円滑に運営されたためには，どのような諸条件が必要であるかを深く慎重に検討することは，これまでの第一次世界大戦前の国際金本位制下におけるイギリスを世界の中心国として，ポンド本位体制の下で<sup>①</sup>，国際間の決済・貸借がうまく運営されてきた諸条件と，また第一次世界大戦を通じ，イギリスが中心国としての地位を一部分アメリカに譲ることになった理由を明らかにすることを助け，

更に、アメリカが中心国としてのいかなる条件を達成したことにより、地位を確立しつつも、世界の唯一の中心国としての地位確立に及ばなかった諸理由を追求する上で、役に立つ基礎研究と考えている。

さらに、第2次世界大戦後、アメリカがいかなる諸条件を充足したことにより、世界の唯一の中心国になり得たのか、また、1971年8月のアメリカ大統領の新経済政策の声明の中で、金とドルの兌換停止による IMF 体制の崩壊にもかかわらず、アメリカは依然として世界の中心国としての地位を維持し、ドル

表 1 原油価格の推移等

実施年月日	標準油種（アラビアンライト）価格	1973. 10. 1 =100	備 考
1960. 9. 14			●産油5か国（サウジアラビア、イラン、イラク、ベネズエラ、クウェート）、59年2月および60年8月のメジャーズの公示価格引下げに対抗し OPEC 創設。
1971. 2. 15	ドル／バーレル % 2.180(+ 21.1)	72.4	●テヘラン協定成立（2/14、湾岸6か国とメジャーズとの間で公示価格の引上げおよび今後の値上げスケジュールを決定）。 ・1971.2.15 より一律35セント／バーレル引上げ。 ・71.6.1 に 2.5% +5 セント／バーレル引上げ。 ・73～75年の毎年1月1日に 2.5%+5 セント／バーレル引上げ。
" . 6. 1	2.285(+ 4.8)	75.9	●テヘラン協定適用。
1972. 1. 20	2.479(+ 8.5)	82.3	●ジュネーブ協定成立（ニクソンショックに伴うドル減価に対処し、テヘラン協定を補足する形で公示価格引上げ、同時に今後の引上げ方式を決定）。 ・1971.1.20 より 8.49% 引上げ。 ・各年の 3, 6, 9, 12月の各1日に、米ドルを除く主要9か国通貨の対米ドル変動率を勘案し価格を見直す。
1973. 1. 1	2.591(+ 4.5)	86.1	●テヘラン協定適用。
" 4. 1	2.742(+ 5.8)	91.1	●ジュネーブ協定適用。
" 6. 1	2.898(+ 5.7)	96.2	●ジュネーブ補足協定成立（73年2月の大幅な通貨変動の経験から、通貨変動に対しより敏感かつ迅速な公示価格調整をねらいジュネーブ協定を変更）。
" 7. 1	2.955(+ 2.0)	98.1	●ジュネーブ補足協定適用。
" 8. 1	3.066(+ 3.8)	101.8	● "

1973. 10. 1	3.011(－ 1.8)	100.0	●	〃
〃 10.16	5.119(+ 70.0)	170.0	●	湾岸6か国閣僚委員会(於ウィーン)決定に基づく一方的値上げ。
〃 11. 1	5.176(+ 1.1)	171.9	●	ジュネーブ補足協定適用。
〃 12. 1	5.036(－ 2.7)	167.3	●	〃
1974. 1. 1	11.651(+131.4)	386.9	●	湾岸6か国閣僚委員会(於テヘラン)決定に基づく一方的値上げ。
〃 11. 1	11.251(－ 3.4)	373.7	●	湾岸6か国閣僚委員会(於アブダビ)決定に基づく値下げ。
1975.10. 1	11.510(+ 10.0)	382.3	●	ウィーン総会決定に基づく一方的値上げ。
〃 1. 1	12.090(+ 5.0)	401.5	}	ドoha総会決定に基づく一方的値上げ(価格2本立) {サウジアラビア, アラブ首長国連邦に適用。他の OPEC 11 か国に適用。
〃	12.704(+ 10.4)	421.9		
1977. 7. 1	12.704(+ 5.1)	421.9	●	サウジアラビア, アラブ首長国連邦値上げ→価格1本化。
1979. 1. 1	13.339(+ 5.0)	443.0	●	アブダビ総会(78/12)決定に基づく一方的値上げ, 同時に79年中の四半期毎の4段階値上げ(通算+14.5%, 年間平均+10%)を決定。
〃 4. 1	14.546(+ 9.0)	483.1	●	ジュネーブ臨時総会(3月)決定に基づく一方的値上げ, 同時に各国個別のマーケットプレミアムを承認。
〃 6. 1	18.000(+ 23.7)	597.8	}	ジュネーブ総会(6月)定決に基づく一方的値上げ, 最高2ドル/バーレルのマーケットプレミアムを容認するほか, 従来同様油種間格差も容認するが, 最高価格は23.5ドル/バーレルで頭打ち。サウジアラビアのみ6月1日に遡及実施。その他諸国は7月1日実施。
	[20.000(+ 37.5)]	[664.2]		
	[23.500(+ 61.6)]	[780.5]		
〃 11. 1	24.000(+ 33.3)	797.1	●	サウジアラビア, カラカス総会(12月17日～20日)に先立つ12月3日に独自の遡及値上げを発表。
1980. 1. 1	26.000(+ 8.3)	863.5	●	カラカス総会(79/12), 80年1月1日以降の価格合意をみるに至らず, サウジアラビア1月28日に遡及値上げを発表, OPEC 各国もこれに追従。
〃 4. 1	28.000(+ 7.7)	929.9	●	サウジアラビア5月14日に独自の遡及値上げを発表。

注 (1) OPEC「Annual Statistical Bulletin」, 石油連盟「石油資料月報」, 石油春秋社「石油便覧」, 日本石油コンサルタント社「世界石油史年表」, 日本銀行調査局資料等から作成。

(2) 価格は1974年11月までは公示価格(Posted Price), 75年10月以降は公式販売価格(Official Selling Price)による(ラスタヌラ港渡し f.o.b.)。

(3) 湾岸6か国とはサウジアラビア, イラン, イラク, クウェート, カタールおよびアラブ首長国連邦。

(4) 日本の輸入原油通関単価(c.i.f. ベース)

	1978/12月	1979/3月	6月	9月	12月	1980/3月
ドル/バーレル	13.7	14.6	17.3	22.1	25.4	31.8
前年同月比(%)	－1.0	+5.9	+26.1	+60.6	+85.2	+117.1

(5) [参考事項] (213 ページ) 参照。

国際比較統計 日本銀行統計局 昭和55年 p.154.

は国際通貨として圧倒的な基準通貨として、また決済通貨（取引通貨）として、準備通貨として、さらに介入通貨として、圧倒的強さを誇っている。——とは言え、ブレトンウッズ協定の成立以来、時の経過とともにドルの強さ、中心国アメリカの地位に、大きな変化が潜在してきているけれども——。

IMF 体制の崩壊の原因については、これまで専門家の間で大いに議論されて来たとは言え、ここでは中心国としてのアメリカが、どのような資格と条件を喪失したことにより崩壊に至ったかを追求することは、これまでとは別な観点からの原因の追求であり、有意義なことと考えている。

すなわち、金とドルの交換停止は、爾後の世界経済に深刻で困難な数々の問題を引き起こすことになった根本的原因と考えている。なぜならば、ドルの減価は、オイルショックに象徴される産油国による原油価格大幅引き上げをもたらした（表 1）、そのことが非産油国の国際収支を急速に著しく悪化させ（表 2）、また、国内経済をもマイナスまたはゼロ成長へと悪化するに至った（表 3）。このような状況の中で、西欧主要先進国をはじめとする各国は、国内景気を回復させるため、財政政策による大幅なスペンディング政策や、割引歩合政策や、公開市場操作を中心とする金融緩和を通じ、金融コスト引き下げによる内需拡大を意図する経済政策に傾注したが（表 4）、結果的に景気回復に失敗し、スタグ

表 2 国際収支表

		1974年		1975		1976		1977	
		受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
日       本	○経常収支尻	—	3,880	—	500	3,210	—	9,320	—
	○貿易収支尻	1,140	—	4,120	—	8,490	—	14,710	—
	○貿易外収支尻	—	4,770	—	4,320	—	4,970	—	5,030
	○移転収支尻	—	250	—	300	—	310	—	360
	資本収支尻	4,990	—	400	—	—	50	—	4,320
	長期資本	—	2,960	—	100	—	650	—	2,290
	短期資本	7,950	—	500	—	600	—	—	2,030
	誤差脱漏	—	90	—	430	120	—	510	—
総合収支		1,020	—	—	530	3,280	—	5,510	—



フレーションと称する不況下でのインフレの昂進を招き (表 5), また, 各国政府の巨額な財政赤字を累積させることになった (表 6A・B)。

このような状況での1979年の第二次オイルショックによる再度原油価格の引き上げに直面した各国は, これまでのような財政・金融政策への指向を断念し, 財政収支を出来る限り均衡させるべく行政改革による財政引き締めを行ない, インフレの一層の昂進を抑制すべく施策し, また, 金融市場において巨額な財政赤字の補填のため, 政府が大きな資金の取り手に廻ったため, 需給バランスからも, 高金利時代の到来をやむなしとした (表 4)。さらに, 金融市場においては, クラウディングアウトを引き起こし, また, 高度通信情報網のハイテク技術に支えられ, 高金利金融商品の創造を通じ, 金融機関相互・証券会社との競争を激化させ, 金融自由化の風潮が, 内からも, また, 諸外国との競争上の点からも, さらに我国の場合, 貿易摩擦問題から波及し (59年6月以来の) 日米円ドル委員会に象徴される各種規制の緩和・撤廃への強い要求もあり, 大いに急速な自由化への進展が英米に次ぎ注目されるところである。他方, 原油価格の引き上げは, 各国に省エネルギーやエネルギーの代替化を促し, 世界経済の不況と相俟って, 原油消費量の低下により産油国経済をも悪化させ, また, 高金利時代の到来は, NICs を中心とした高度成長時代に逸早く工業国化への転進

(単位: 百万 SDR)

1978		1979		1980		1981		1982		1983	
受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
14,000	—	—	6,740	—	8,250	4,340	—	6,320	—	19,590	—
20,300	—	1,460	—	1,650	—	17,220	—	16,470	—	29,560	—
—	5,740	—	7,350	—	8,720	—	11,520	—	8,900	—	8,520
—	560	—	860	—	1,180	—	1,370	—	1,250	—	1,450
—	6,160	—	5,340	14,520	—	—	1,660	—	14,730	—	20,080
—	9,080	—	9,780	1,810	—	—	5,640	—	14,560	—	17,610
2,920	—	4,440	—	12,710	—	3,980	—	—	170	—	2,470
110	—	1,890	—	—	2,390	320	—	4,120	—	1,910	—
7,950	—	—	10,190	3,880	—	3,000	—	—	4,290	1,140	—

		1974年		1975		1976		1977	
		受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
米 国	○経常収支尻	1,720	—	15,150	—	3,960	—	—	12,000
	○貿易収支尻	—	4,460	7,420	—	—	8,080	—	26,400
	○貿易外収支尻	12,350	—	11,760	—	16,630	—	18,750	—
	○移転収支尻	—	6,170	—	4,030	—	4,590	—	4,350
	資本収支尻	—	7,670	—	23,560	—	21,790	—	17,090
	長期資本	—	6,270	—	16,190	—	13,230	—	11,600
	短期資本	—	1,400	—	7,370	—	8,560	—	5,490
	誤差脱漏	—	1,340	4,850	—	8,720	—	—	830
	総合収支	—	7,290	—	3,560	—	9,110	—	29,920

		1974年		1975		1976		1977	
		受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
イ ギ リ ス	○経常収支尻	—	6,430	—	3,011	—	1,297	461	—
	○貿易収支尻	—	9,775	—	5,425	—	5,068	—	2,240
	○貿易外収支尻	4,201	—	3,345	—	5,025	—	4,426	—
	○移転収支尻	—	856	—	931	—	1,254	—	1,725
	資本収支尻	226	—	1,272	—	—	2,726	6,532	—
	長期資本	1,296	—	—	908	—	1,562	2,919	—
	短期資本	—	1,070	2,180	—	—	1,164	3,613	—
	誤差脱漏	257	—	66	—	332	—	3,948	—
	総合収支	—	5,947	—	1,673	—	3,691	10,941	—

		1974年		1975		1976		1977	
		受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
西 ド イ ッ	○経常収支尻	8,190	—	2,900	—	3,000	—	3,690	—
	○貿易収支尻	18,460	—	14,550	—	14,430	—	16,890	—
	○貿易外収支尻	—	5,110	—	5,670	—	5,190	—	6,630
	○移転収支尻	—	5,160	—	5,980	—	6,240	—	6,570
	資本収支尻	—	7,820	—	3,990	100	—	—	350
	長期資本	—	1,850	—	5,580	—	150	—	4,740
	短期資本	—	5,970	1,590	—	250	—	4,390	—
	誤差脱漏	—	880	350	—	—	20	480	—
	総合収支	—	510	—	740	3,080	—	3,820	—

1978		1979		1980		1981		1982		1983	
受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
—	11,350	—	720	1,490	—	5,170	—	—	8,580	—	39,210
—	27,440	—	21,310	—	19,570	—	23,870	—	33,240	—	57,370
20,500	—	25,310	—	26,890	—	35,360	—	32,680	—	26,880	—
—	4,410	—	4,730	—	5,830	—	6,320	—	8,030	—	8,720
—	24,130	—	11,120	—	27,620	—	24,580	—	19,820	26,990	—
—	10,340	—	18,300	—	6,550	—	2,260	—	3,540	—	6,750
—	13,790	7,180	—	—	21,070	—	22,320	—	16,280	33,740	—
9,200	—	19,720	—	19,170	—	18,510	—	30,090	—	8,470	—
—	26,280	7,870	—	—	6,960	—	910	1,690	—	—	3,750

1978		1979		1980		1981		1982		1983	
受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
1,543	—	—	751	6,691	—	12,595	—	8,159	—	4,091	—
—	1,372	—	5,580	2,865	—	6,446	—	3,695	—	—	1,042
5,866	—	8,542	—	7,520	—	9,457	—	7,698	—	8,289	—
—	2,951	—	3,713	—	3,693	—	3,309	—	4,234	—	3,156
—	5,884	—	14,119	—	5,232	—	11,457	149	—	—	6,997
—	3,948	—	5,147	—	7,207	—	15,105	—	13,646	—	10,422
—	1,936	—	8,971	1,974	—	3,649	—	13,795	—	3,425	—
1,206	—	511	—	—	1,908	—	846	—	5,234	843	—
—	3,135	—	14,359	—	449	293	—	3,074	—	—	2,062

1978		1979		1980		1981		1982		1983	
受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
7,070	—	—	4,760	—	12,240	—	4,770	3,230	—	3,740	—
20,440	—	13,080	—	6,890	—	14,190	—	22,930	—	20,800	—
—	6,490	—	8,820	—	8,710	—	8,880	—	9,120	—	7,270
—	6,880	—	9,020	—	10,420	—	10,090	—	10,580	—	9,790
2,560	—	4,100	—	1,400	—	5,240	—	—	140	—	4,980
—	940	5,120	—	2,290	—	3,000	—	—	5,970	—	2,320
3,500	—	—	1,020	—	890	2,240	—	5,830	—	—	2,660
—	1,580	—	1,850	—	1,280	640	—	—	400	10	—
8,050	—	—	2,510	—	12,120	1,110	—	2,690	—	—	1,230

		1974年		1975		1976		1977	
		受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
フ ラ ン ス	○経 常 収 支 尻	—	4,861	77	—	—	5,115	—	2,562
	○貿 易 収 支 尻	—	3,573	897	—	—	3,998	—	2,336
	○貿 易 外 収 支 尻	844	—	1,345	—	1,011	—	2,184	—
	○移 転 収 支 尻	—	2,132	—	2,165	—	2,128	—	2,410
	資 本 収 支 尻	1,979	—	—	1,487	1,805	—	128	—
	長 期 資 本	—	151	—	869	—	1,475	364	—
	短 期 資 本	2,130	—	—	618	3,280	—	—	236
	誤 差 脱 漏	2,592	—	4,296	—	705	—	3,022	—
総 合 収 支		—	290	2,886	—	—	2,605	588	—

		1974年		1975		1976		1977	
		受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
イ タ リ ア	○経 常 収 支 尻	—	6,679	—	465	—	2,463	2,098	—
	○貿 易 収 支 尻	—	7,075	—	956	—	3,671	—	122
	○貿 易 外 収 支 尻	824	—	973	—	1,748	—	2,862	—
	○移 転 収 支 尻	—	428	—	482	—	540	—	642
	資 本 収 支 尻	707	—	—	979	5,274	—	3,498	—
	長 期 資 本	1,039	—	778	—	264	—	866	—
	短 期 資 本	—	332	—	1,757	5,010	—	2,632	—
	誤 差 脱 漏	229	—	—	658	—	1,478	—	530
総 合 収 支		—	5,743	—	2,102	1,333	—	5,066	—

注 (1) IMF Balance of Payments Yearbook による。なお、ISDR 当り各国為替相場については129頁の備考参照。

(2) 総合収支には SDR 配分等の特別取引は含まない。

(3) 資本収支の受取は資本の流入（資産の減、負債の増）、その支払は資本の流出（資産の増、負債の減）を表わす。

(4) 上記計数は IMF において、各国の報告計数に加工を施して作成しているため、各国公表の計数とは必ずしも合致しない。(1974～1978)

日本銀行統計局 昭和55年 p. 127, 128, 129 昭和60年 p. 136, 137, 138

〔備考〕 ISDR 当り各国為替相場（年平均）。

		1974年	1975	1976	1977
日 本 (円)		350.58	360.36	342.37	313.49
米 国 (ドル)		1.2026	1.2142	1.1545	1.1675
イ ギ リ ス (ポンド)		0.51444	0.54885	0.64250	0.66931
西 ド イ ツ (マルク)		3.1121	2.9872	2.9071	2.7107
フ ラ ン ス (フラン)		5.7846	5.2043	5.5182	5.7365
イ タ リ ア (リラ)		782.1	792.7	960.9	1,030.2

注 IMF International Financial Statistics による。

1978		1979		1980		1981		1982		1983	
受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
3,008	—	3,996	—	—	3,220	—	4,055	—	10,944	—	3,979
566	—	—	2,476	—	10,300	—	8,446	—	14,304	—	7,468
5,064	—	9,587	—	10,283	—	7,992	—	7,543	—	7,061	—
—	2,622	—	3,116	—	3,203	—	3,601	—	4,184	—	3,572
—	2,868	—	3,069	6,150	—	1,818	—	8,645	—	7,326	—
—	2,628	—	4,026	—	6,502	—	7,650	1,167	—	9,122	—
—	240	957	—	12,652	—	9,468	—	7,478	—	—	1,796
2,248	—	433	—	1,749	—	—	1,913	—	836	602	—
2,388	—	1,361	—	4,680	—	—	4,151	—	3,135	3,949	—

1978		1979		1980		1981		1982		1983	
受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払	受取	支払
5,076	—	4,202	—	—	7,541	—	7,108	—	5,061	—	535
2,318	—	—	752	—	12,612	—	9,127	—	7,245	—	4,069
3,982	—	4,607	—	4,136	—	1,378	—	1,403	—	2,426	—
—	1,224	347	—	935	—	641	—	781	—	1,108	—
—	89	—	3,189	8,376	—	6,979	—	1,160	—	4,067	—
1,066	—	—	2,150	2,427	—	6,903	—	4,584	—	294	—
—	1,155	—	1,039	5,949	—	76	—	—	3,424	3,773	—
262	—	—	411	—	724	—	479	64	—	1,562	—
5,249	—	603	—	111	—	—	609	—	3,838	5,093	—

注 (1) IMF Balance of Payments Yearbook による。なお、ISDR 当り各国為替相場については 138 ページの備考参照。

(2) 日本、米国、西ドイツについては、原資料では十億 SDR 表示であるのを本表では百万 SDR に表示替えしてある。

(3) 総合収支には SDR 配分等の特別取引は含まない。

(4) 資本収支の受取は資本の流入（資産の減、負債の増）、支払は資本の流出（資産の増、負債の減）を表わす。

(5) 上記計数は IMF において、各国の報告計数に加工を施して作成しているため、各国公表の計数とは必ずしも一致しない。（1979～1983）

1978	1979	1980	1981	1982	1983
263.51	283.13	295.11	260.05	274.95	253.91
1.2520	1.29200	1.30153	1.17916	1.10401	1.06900
0.65292	0.60897	0.55949	0.58147	0.63068	0.70468
2.5148	2.3681	2.3658	2.6649	2.6790	2.7295
5.6500	5.4968	5.5003	6.4083	7.2560	8.1472
1,062.5	1,073.5	1,114.6	1,340.5	1,493.2	1,623.6

表 3 国民総生産 (実質) の推移

年	日	本	米	国	イ	西	フ	イ	カ	ダ				
	(1970年) (価 格)	前年比	(1972年) (価 格)	前年比	(1970年) (価 格)	前年比	(1970年) (価 格)	前年比	(1970年) (価 格)	前年比				
1967	十億円 50,693	+12.9	% 10,077	+2.7	% 47,838	+2.6	% 5,581	-0.1	% 6,635	+4.7	% 49,117	+7.0	% 77,344	+3.3
1968	57,492	+13.4	10,518	+4.4	49,365	+3.2	5,944	+6.5	6,918	+4.3	52,221	+6.3	81,864	+5.8
1969	63,648	+10.7	10,788	+2.6	50,190	+1.7	6,413	+7.9	7,401	+7.0	55,182	+5.7	86,225	+5.3
1970	70,606	+10.9	10,753	-0.3	51,463	+2.5	6,790	+5.9	7,826	+5.7	57,937	+5.0	88,390	+2.5
1971	75,828	+7.4	11,075	+3.0	52,812	+3.1	7,017	+3.3	8,241	+5.3	58,836	+1.6	94,450	+6.9
1972	82,738	+9.1	11,711	+5.7	53,978	+2.2	7,273	+3.6	8,746	+6.1	60,689	+3.1	100,248	+6.1
1973	90,873	+9.8	12,350	+5.5	58,331	+8.1	7,630	+4.9	9,221	+5.4	64,905	+6.9	107,812	+7.5
1974	89,733	-1.3	12,178	-1.4	57,314	-1.7	7,657	+0.4	9,475	+2.8	67,660	+4.2	111,766	+3.7
1975	91,969	+2.5	12,021	-1.3	55,959	-2.4	7,468	-2.5	9,539	+0.7	65,320	-3.5	112,955	+1.1
1976	97,499	+6.0	12,747	+6.0	57,717	+3.1	7,891	+5.7	10,054	+5.7	69,072	+5.7	118,484	+4.9
1977	102,475	+5.1	13,373	+4.9	57,348	-0.6	8,080	+2.4	...	...	70,226	+1.7	121,566	+2.6
(参考一名目) (1977年)	十億円 183,600		億ドル 18,896		百万ポンド 139,832		億マルク 11,933		(76年) 億フラン 16,635		十億リラ 172,397		百万カナ ダドル 207,714	
1968~77年 平均成長率 (実 質)	+7.3%		+2.9%		+1.8%		+3.8%		(68~76年) +4.7%		+3.6%		+4.6%	
国民所得 (1人当りドル) (1976年)	4,193		6,341		3,094		5,662		5,071		2,473		6,281	

注 (1) 各国資料による。なお、24~28ページ参照。

(2) フランス図表は1976年まで。

国際比較統計 日本銀行統計局 昭和53年6月より p. 21.



表 4 公定歩合の推移

	日 本①	米 国②	イ リ ギ ス⑤	西 イ ド⑥	フ ラ ンス⑦	イ タ リ ア⑧	ス イ ス⑬	カ ナ ダ⑨	ベ ル ギ ー⑩	オ ン ラ タ ⑪	ス ウ ェ デ ン⑫	デン マ ーク⑬
年 末												
1963 (昭 38)	5.84	3.50	4.00	3.00	4.00	3.50	2.00	4.00	4.25	3.50	4.00	6.50
1964 ( 39)	6.57	4.00	7.00	3.00	4.00	3.50	2.50	4.25	4.75	4.50	5.00	6.50
1965 ( 40)	5.48	4.50	6.00	4.00	3.50	3.50	2.50	4.75	4.75	4.50	5.50	6.50
1966 ( 41)	5.48	4.50	7.00	5.00	3.50	3.50	3.50	5.25	5.25	5.00	6.00	6.50
1967 ( 42)	5.84	4.50	8.00	3.00	3.50	3.50	3.00	6.00	4.00	4.50	6.00	7.50
1968 ( 43)	5.84	5.50	7.00	3.00	6.00	3.50	3.00	6.50	4.50	5.00	5.00	6.00
1969 ( 44)	6.25	6.00	8.00	6.00	8.00	4.00	3.75	8.00	7.50	6.00	7.00	9.00
1970 ( 45)	6.00	5.50	7.00	6.00	7.00	5.50	3.75	6.00	6.50	6.00	7.00	9.00
1971 ( 46)	4.75	4.50	5.00	4.00	6.50	4.50	3.75	4.75	5.50	5.00	5.00	7.50
1972 ( 47)	4.25	4.50	9.00	4.50	7.50	4.00	3.75	4.75	5.00	4.00	5.00	7.00
1973 ( 48)	9.00	7.50	13.00	7.00	11.00	6.50	4.50	7.25	7.75	7.00	5.00	9.00
1974 ( 49)	9.00	7.75	11.50	6.00	13.00	8.00	5.50	8.75	8.75	8.00	7.00	10.00
1975 ( 50)	6.50	6.00	11.25	3.50	8.00	6.00	3.00	9.00	6.00	4.50	6.00	7.50
1976 ( 51)	6.50	5.25	14.25	3.50	10.50	15.00	2.00	8.50	9.00	6.00	8.00	10.00
1977 ( 52)	4.25	6.00	7.00	3.00	9.50	11.50	1.50	7.50	9.00	4.50	8.00	9.00
1978 ( 53)	3.50	9.50	12.50	3.00	9.50	10.50	1.00	10.75	6.00	6.50	6.50	8.00
1979 ( 54)	6.25	12.00	17.00	6.00	9.50	15.00	2.00	14.00	10.50	9.50	9.00	11.00
1980 ( 55)	7.25	13.00	14.00	7.50	9.50	16.50	3.00	17.26	12.00	8.00	10.00	11.00
1981 ( 56)	5.50	12.00	—	7.50	9.50	19.00	6.00	14.66	15.00	9.00	11.00	11.00
1982 ( 57)	5.50	8.50	—	5.00	9.50	18.00	4.50	10.05	11.50	5.00	10.00	10.00
1983 (昭 58)												
1								9.83		4.50	9.00	
2								9.48				
3								9.42				
4								9.37				
5								9.50				
6								9.42				



日本は日本銀行の商業手形割引歩合。米国はニューヨーク連邦準備銀行のレート。イギリスは1972年以降最低貸出歩合（1981年8月20日以降公表を停止）。フランスの公定歩合は1979年以降金融調節上の実質的意味を失っており、金利操作の中心はオペ介入金利におかれている。またカナダの公定歩合は1980年3月以降大蔵省証券の入札レートに連動させる方式を採用（91日物 TB 入札平均利回+0.25%）。国際比較統計 日本銀行統計局 昭和60年6月 p. 64。

表 5 卸売物価の推移

(1970年=100)

	日	米		国	イギリス		西ドイツ (生産者物価)	フランス		イタリア	カナダ		
		前年比	%		前年比	%		前年比	%		前年比	%	
年平均													
1969	96.4	+ 2.0	96.5	+ 4.0	93.3	+ 3.7	95.3	93.2	+ 9.4	93.1	+ 4.0	97.7	+ 3.8
1970	100.0	+ 3.7	100.0	+ 3.7	100.0	+ 7.1	100.0	100.0	+ 7.3	100.0	+ 7.4	100.0	+ 2.4
1971	99.2	- 0.8	103.3	+ 3.3	109.1	+ 9.1	104.3	103.7	+ 3.7	103.3	+ 3.3	101.9	+ 1.9
1972	100.0	+ 0.8	107.9	+ 4.5	114.8	+ 5.3	107.0	109.8	+ 5.8	107.4	+ 3.9	106.4	+ 4.4
1973	115.8	+15.8	122.0	+13.1	123.3	+ 7.4	114.1	123.7	+12.7	126.6	+17.9	118.3	+11.2
1974	152.2	+31.4	145.0	+18.9	151.4	+22.8	129.4	153.0	+23.6	178.1	+40.7	140.8	+19.0
1975	156.7	+ 3.0	158.4	+ 9.2	184.8	+22.1	135.5	154.4	+ 1.0	193.3	+ 8.5	156.7	+11.3
1976	164.6	+ 5.0	165.8	+ 4.6	216.8	+17.3	140.8	170.4	+10.3	237.5	+22.9	164.6	+ 5.0
1977	167.7	+ 1.9	175.9	+ 6.1	259.7	+19.8	144.5	181.8	+ 6.7	277.0	+16.6	177.7	+ 8.0
1978	163.5	- 2.5	189.6	+ 7.8	283.4	+ 9.1	146.3	190.2	+ 4.6	300.2	+ 8.4	194.1	+ 9.2
1979	175.4	+ 7.3	213.3	+12.5	317.9	+12.2	153.6	212.6	+11.8	346.8	+15.5	222.1	+14.4
1970~1979年 平均上昇率	+ 6.2%	+ 8.3%		+ 13.0%	+ 4.9%		+ 8.6%		+ 14.1%	+ 8.6%			

注 各国資料による。  
国際比較統計 日本銀行統計局 昭和55年6月 p. 17.

表 6-A 歳出・収支尻の推移

	日 本 ①		米		国②		イ ギ リ ス ⑤		西 ド イ ツ ⑥		フ ラ ン ス ⑦	
	歳 出	収 支 尻	歳	出	収 支 尻	歳	出	収 支 尻	歳	出	収 支 尻	
年度	億円	億円	億ドル	億ドル	億ドル	億ポンド	億ポンド	億ポンド	億マルク	億マルク	億フラン	
1974	190,998	- 8,807	291,371	- 10,885	25,005	- 2,965	134,035	- 10,463	259,884	百フラン	+ 20,190	
1975	208,609	- 46,680	365,793	- 85,148	34,041	- 5,916	156,894	- 33,106	332,876	- 37,328		
1976	244,676	- 65,898	374,188	- 56,578	38,598	- 6,107	161,672	- 25,888	357,960	- 7,286		
1977	290,598	- 91,875	417,131	- 51,033	42,395	- 4,652	170,912	- 22,196	417,389	- 23,449		
1978	340,960	- 98,627	460,668	- 43,743	49,776	- 8,432	189,133	- 26,356	472,065	- 27,363		
1979	387,898	- 124,826	508,660	- 28,135	57,924	- 9,123	203,358	- 25,843	541,755	- 23,302		
1980	434,050	- 135,345	599,294	- 67,861	71,087	- 8,792	215,710	- 27,620	629,921	- 29,295		
1981	469,212	- 123,777	691,673	- 72,592	82,352	- 10,462	232,995	- 37,961	766,636	- 81,061		
1982	472,451	- 132,885	739,524	- 130,708	89,237	- 4,341	244,646	- 37,678	896,419	- 84,540		
1983	506,353	- 124,687	803,326	- 190,411	96,257	- 9,647	246,748	- 31,940	996,438	- 134,303		
1984	515,134	- 128,650	867,650	- 184,448	103,385	- 8,191	251,781	- 28,648	989,529	- 129,987		
1974~1983年 平均増加率	% + 10.4		% + 11.5		% + 15.3		% + 6.5		% + 14.3			

注 各国資料による。83~84ページ参照。収支尻のマイナスは赤字を示す。  
国際比較統計 日本銀行統計局 昭和60年6月 p. 14

表 6-B 国債所有者別残高 (年末または年度末)

		合 計	(参考) 国債・借入金等所有者別構成比		
			政府	中央銀行	金融機関
① 日本 (億円)	1973	100,495	43.7	18.1	25.4
	1974	115,238	41.1	28.6	13.7
	1975	143,001	40.9	35.6	12.1
	1976	198,996	33.2	32.7	23.9
	1977	280,144	33.4	26.4	28.9
	1978	401,118	34.4	17.6	31.6
	1979	542,757	33.7	15.3	33.3
	1980	671,465	30.2	17.9	30.5
	1981	837,654	32.0	15.0	23.8
	1982	951,945	30.6	15.3	22.3
	1983	1,076,186	29.5	12.9	22.2
	1984	1,211,097	31.0	10.8	24.3
② 米国 (億ドル)	1973	4,699	27.6	16.7	14.8
	1974	4,927	28.0	16.3	13.1
	1975	5,766	24.1	15.6	17.2
	1976	6,535	22.5	14.8	18.7
	1977	7,189	21.5	14.3	17.0
	1978	7,892	21.5	13.9	14.4
	1979	8,451	22.1	13.9	13.9
	1980	9,302	20.7	13.0	15.5
	1981	10,287	19.8	12.7	15.5
	1982	11,971	17.5	11.6	17.8
	1983	14,107	16.8	10.8	19.0
	1984	16,630	17.4	9.7	17.2
⑤ イギリス (百万ポンド)	1973	36,526	15.1	12.5	29.0
	1974	39,490	15.6	13.7	28.0
	1975	44,495	13.7	12.0	26.7
	1976	54,041	12.3	11.8	33.9
	1977	63,604	11.0	10.5	35.2
	1978	75,352	12.2	11.0	36.5
	1979	83,391	11.1	9.3	39.4
	1980	91,619	9.8	9.2	41.4
	1981	110,177	10.7	5.5	43.6
	1982	116,254	9.8	2.5	47.5
	1983	125,550	7.8	3.2	48.7
	1984	140,554	7.1	1.5	49.3
⑥ 西ドイツ (百万マルク)	1972	26,993	5.0	5.9	62.8
	1973	29,575	4.8	6.8	62.8
	1974	33,363	5.4	5.0	64.9
	1975	47,491	5.2	4.7	67.2
	1976	63,449	4.9	3.8	68.1
	1977	83,811	3.2	3.0	69.1
	1978	97,448	2.8	3.0	70.8
	1979	104,229	2.4	2.4	71.2
	1980	107,013	2.3	2.9	67.7
	1981	102,395	2.0	2.9	67.1
	1982	127,414	1.7	2.3	66.1
	1983	161,140	1.6	2.3	63.2
⑦ フランス (百万フラン)	1972	55,887	8.2	14.5	8.7
	1973	40,687	0.4	11.4	1.1
	1974	36,779	0.1	9.8	0.9
	1975	77,610	8.7	23.6	9.1
	1976	91,435	13.6	27.6	4.7
	1977	101,140	15.9	17.4	10.5
	1978	125,860	16.6	18.0	12.8
	1979	136,560	18.0	14.0	12.3
	1980	131,600	16.8	9.9	8.7
	1981	186,470	27.3	0.9	28.6
	1982	269,750	19.2	6.6	18.4
	1983	307,950	18.0	9.7	14.0
⑧ イタリア (十億リラ)	1972	7,878	13.0	39.1	21.7
	1973	8,449	18.3	35.4	19.5
	1974	11,013	13.5	36.1	13.7
	1975	15,175	12.3	24.0	17.7
	1976	17,359	10.8	23.2	12.6
	1977	34,806	8.3	28.7	20.1
	1978	55,712	6.2	29.5	22.8
	1979	65,866	9.1	23.1	24.2
	1980	64,822	7.2	20.7	17.8
	1981	73,626	9.6	21.6	13.8
	1982	99,452	6.4	19.1	16.6
	1983	169,634	5.7	15.1	18.6

- 注 (1) 日本は大蔵省調。西ドイツは OECD Financial Statistics の証券所有者別残高 (A162/01), その他は各国資料 (巻末の主要資料参照) による。
- (2) 日本の政府は主として資金運用部および国債整理基金, 米国は政府信託基金, イギリスは政府関係機関, 西ドイツは主として社会保険機関, フランスは預金供託金庫, イタリアは預金貸付金庫の計数。なお日本は登録債の所有者別内訳で, 証券発行国債は全額その他項目に計上。また, イギリスは中・長期債, 大蔵省証券, 西ドイツは金融機関への委託国債, フランスは登録大蔵省証券, イタリアは投資者別の各所有者別統計で証券の種類, 調査方法等が異なるので, これらの内容については当局「外国経済統計年報」参照。
- (3) 日本, イギリスは表示された年の3月末, フランスは10月末, その他は年末の計数。
- (4) イギリスは政府保証債を, 西ドイツは州債, 地方債を, またイタリア銀行にはイタリア為替局をそれぞれ含む。
- (5) 国債・借入金等所有者別構成比は, 日本は借入金, 一時借入金を, その他は借入金, その他債務をそれぞれ含めた構成比。

国際比較統計 日本銀行統計局 昭和55年 p.78 昭和60年 p.90

表 6-C 1985年の累積債務国の債務見通し

(単位億ドル, カッコ内は1984年, 債務は年末残高)

	経 常 収 支	対 外 債 務	う ち 民 間 銀 行 か ら の 債 務
ユーゴスラビア	4.0( 9.0)	200( 185)	83( 79)
アルゼンチン	▲20.0(▲25.0)	508( 478)	333( 320)
ボリビア	▲3.0( ▲2.0)	42( 41)	11( 11)
ブラジル	▲3.0( 5.0)	1,035(1,020)	734( 737)
チリ	▲17.0( ▲21)	219( 204)	161( 156)
コロンビア	▲15.0( ▲19)	139( 126)	79( 75)
エクアドル	▲3.0( ▲2.0)	79( 76)	46( 47)
象牙海岸	3.0( 0.0)	63( 62)	26( 26)
メキシコ	▲7.0( 39)	977( 966)	723( 725)
ナイジェリア	8.0( ▲2.0)	180( 192)	40( 57)
ペルー	▲3.0( ▲4.0)	139( 134)	49( 50)
フィリピン	▲3.0( ▲15)	274( 262)	139( 134)
ウルグアイ	▲1.0( ▲1.0)	49( 47)	25( 25)
ベネズエラ	20.0( 43)	326( 348)	259( 276)
モロッコ	▲10.0( ▲13)	144( 132)	35( 34)
以上 15 カ 国 計	▲48( ▲8)	4,374(4,275)	2,746(2,753)
そ の 他 12 カ 国 計	▲80( ▲87)	2,497(2,307)	1,132(1,050)
27 カ 国 計	▲128( ▲95)	6,871(6,582)	3,878(3,803)

注 12カ国(地域)はアルジェリア, エジプト, ギリシャ, ハンガリー, インドネシア, 韓国, マレーシア, ポルトガル, 台湾, タイ, チュニジア, トルコ

を計るべく, 海外から多額の借金をした発展途上国に, 耐え難い金利負担を強いることとなり, 一挙に累積債務国の問題が世界経済に大きな波紋を投げかけることとなった。(表6-C)このような状況は, 産油国・非産油国を問わず, 世界同時不況を引き起し, 各国の高失業率(表7), 各地での内乱・革命・地域紛争・戦争をもたらし, また, 国際収支の悪化は, 先進国と言えども貿易摩擦問題や, 保護貿易主義の台頭を指向する風潮が大きく取り上げられることとなっている。さらに, このような世界経済の悪化は, 本来生産・販売のために大いに利用されるべく資金が金融市場にて高金利を求め, あるいは, 株式・債券市場や外国為替市場, また, 各種商品市場・同先物市場にて投機資金として, マネーゲームを煽り, 経済不安に悩む諸国からの逃避資金と相俟って, 一部主要先進国での取引所の史上最高値の昂進という活況を呈することとなった。

このような状況は, 実態の経済力と乖離した証券市場のブームであり, また,

表 7-A 主要国労働統計

	年	雇用指数(製造業) (1970年=100)		求 人 数		失 業 者 数		失 業 率
			前 年 比		前 年 比		前 年 比	
日       本	1970	100.0	+ 3.8	千人	%	千人	%	%
	1971	100.7	+ 0.7	1,507	+ 7.4	590	+ 3.5	1.2
	1972	98.8	- 1.9	1,315	-12.7	640	+ 8.5	1.2
	1973	99.1	+ 0.3	1,402	- 6.7	730	+14.1	1.4
	1974	98.6	- 0.5	1,963	+39.7	680	- 6.8	1.3
	1975	93.5	- 5.2	1,425	-27.3	730	+ 7.4	1.4
	1976	91.6	- 2.0	943	-33.8	1,000	+35.1	1.9
	1977	90.7	- 0.9	948	+ 0.6	1,080	+ 8.0	2.0
	1978	88.7	- 2.3	845	-10.8	1,100	+ 1.9	2.0
米       国	1970	100.0	- 4.0	指数	%	千人	%	%
	1971	96.2	- 3.8	100	-50.0	4,088	+44.4	4.9
	1972	98.9	+ 2.8	89	-11.0	4,993	+22.1	5.9
	1973	104.1	+ 5.3	110	+23.6	4,840	- 3.1	5.6
	1974	103.7	- 0.4	135	+22.7	4,304	-11.1	4.9
	1975	94.6	- 8.8	118	-12.6	5,076	+17.9	5.6
	1976	98.1	+ 3.7	86	-27.1	7,830	+54.3	8.5
	1977	101.4	+ 3.4	102	+18.6	7,288	- 6.9	7.7
	1978	105.0	+ 3.6	126	+23.5	6,855	- 5.9	7.0
イ       ギ       リ       ス	1970	100.0	- 0.1	千人	%	千人	%	%
	1971	96.6	- 3.4	211	-15.3	602	+ 6.4	2.6
	1972	93.3	- 3.4	139	-34.1	776	+28.9	3.4
	1973	93.9	+ 0.6	225	+61.9	855	+10.2	3.7
	1974	94.4	+ 0.5	456	+102.7	611	-28.5	2.6
	1975	89.8	- 4.9	336	-26.3	600	- 1.8	2.6
	1976	86.9	- 3.2	101	-61.6	929	+54.8	3.9
	1977	88.1	+ 1.4	138	+36.6	1,270	+36.7	5.3
	1978	87.5	- 0.7	153	+10.9	1,378	+ 8.5	5.7
西       ド       イ       ン	1970	100.0	+ 2.6	千人	%	千人	%	%
	1971	99.3	- 0.7	795	+ 6.4	149	-16.8	0.7
	1972	97.7	- 1.6	648	-18.5	185	+24.2	0.9
	1973	97.7	-	546	-15.7	246	+33.0	1.1
	1974	96.2	- 1.5	572	+ 4.8	274	+11.0	1.3
	1975	90.6	- 5.8	315	-44.9	583	+113.2	2.6
	1976	90.3	- 0.3	236	-25.1	1,074	+84.5	4.7
	1977	89.8	- 0.6	235	- 0.4	1,060	- 1.3	4.6
	1978	90.1	+ 0.3	231	- 1.7	1,030	- 2.8	4.5
				245	+ 6.1	993	- 3.6	4.4



フ ラ ン ス	1970	100.0	+ 1.7	千人 93.2	+18.9	262.1	+17.6	
	1971	100.5	+ 0.5	125.8	+35.0	338.2	+29.0	
	1972	101.2	+ 0.7	166.5	+32.4	383.5	+13.4	
	1973	103.0	+ 1.8	251.7	+51.2	393.9	+ 2.7	
	1974	103.4	+ 0.4	204.6	-18.7	497.7	+26.4	
	1975	100.4	- 2.9	109.2	-46.6	839.7	+68.7	
	1976	99.9	- 0.5	123.9	+13.5	933.5	+11.2	
	1977	98.7	- 1.2	103.9	-16.1	1,071.7	+14.8	
	1978	96.6	- 2.1	87.0	-16.3	1,166.9	+ 8.9	
イ タ リ ア	1970	100.0	+ 3.5	...	...	609	- 7.2	3.2
	1971	102.0	+ 2.0	...	...	609	- 1.0	3.2
	1972	101.1	- 0.9	...	...	697	+14.4	3.7
	1973	102.8	+ 1.7	...	...	668	- 4.2	3.5
	1974	107.0	+ 4.1	...	...	560	-16.2	2.9
	1975	107.2	+ 0.2	...	...	654	+16.8	3.3
	1976	107.5	+ 0.3	...	...	732	+11.9	3.7
	1977	112.9	+ 5.0	...	...	1,545	+111.1	7.2
	1978	111.3	- 1.4	...	...	1,571	+ 1.7	7.2

表 7-B

		雇用指数(製造業) (1975年=100)		求 人 数		失 業 者 数		失 業 率
			前 年 比		前 年 比		前 年 比	
① 日 本	年		年	千人	%	千人	%	%
	1976	98.0	- 2.0	948	+ 0.5	1,080	+ 8.0	2.0
	1977	97.0	- 1.0	845	-10.9	1,100	+ 1.9	2.0
	1978	94.9	- 2.2	885	+ 4.7	1,240	+12.7	2.2
	1979	94.5	- 0.4	1,071	+21.0	1,170	- 5.6	2.1
	1980	95.4	+ 1.0	1,128	+ 5.3	1,140	- 2.6	2.0
	1981	96.5	+ 1.2	1,108	- 1.8	1,260	+10.5	2.2
	1982	97.1	+ 0.6	1,055	- 4.8	1,360	+ 7.9	2.4
	1983	97.0	- 0.1	1,068	+ 1.2	1,560	+14.7	2.6
	1984	98.4	+ 1.4	1,164	+ 9.0	1,610	+ 3.2	2.7
② 米 国	1976	103.7	+ 3.7	指数 119.0	+19.0	7,406	- 6.6	7.6
	1977	107.4	+ 3.6	147.0	+23.5	6,991	- 5.6	6.9
	1978	111.9	+ 4.2	188.0	+27.9	6,202	-11.3	6.0
	1979	114.8	+ 2.6	196.0	+ 4.3	6,137	- 1.0	5.8
	1980	110.7	- 3.6	161.0	-17.9	7,637	+24.4	7.0
	1981	110.1	- 0.5	148.0	- 8.1	8,273	+ 8.3	7.5
	1982	102.5	- 6.9	108.0	-27.0	10,578	+27.9	9.5
	1983	100.9	- 1.6	119.0	+10.2	10,717	+ 1.3	9.5
	1984	106.9	+ 5.9	164.0	+37.8	8,539	-20.3	7.4



⑤ イ ギ リ ス	1976	96.8	- 3.2	千人 140	+35.5	1,305	+39.4	5.6
	1977	97.4	+ 0.6	155	+10.8	1,345	+ 3.1	5.7
	1978	96.9	- 0.5	220	+42.2	1,383	+ 2.8	5.7
	1979	96.5	- 0.4	204	- 7.3	1,296	- 6.3	5.3
	1980	92.2	- 0.4	84	-59.1	1,665	+28.5	6.8
	1981	82.7	-10.3	92	+10.4	2,520	+51.4	10.4
	1982	78.6	- 50	103	+11.2	2,917	+15.7	12.1
	1983	75.0	- 4.6	140	+36.4	3,105	+ 6.4	12.9
	1984	74.2	- 1.1	148	+ 5.7	3,160	+ 1.8	13.1
⑥ 西 ド イ ツ	1976	100.3	+ 0.3	千人 235	- 0.4	1,060	- 1.3	4.6
	1977	99.9	- 0.4	231	- 1.7	1,030	- 2.8	4.5
	1978	99.9	-	246	+ 6.5	993	- 3.6	4.3
	1979	100.6	+ 0.7	304	+23.6	876	-11.8	3.8
	1980	101.1	- 0.5	308	+ 1.3	889	+ 1.5	3.8
	1981	98.1	- 3.0	208	-32.5	1,272	+43.1	5.5
	1982	94.8	- 3.4	105	-49.5	1,833	+44.1	7.5
	1983	91.1	- 3.9	76	-27.6	2,258	+23.2	9.1
	1984	89.8	- 1.4	88	+15.8	2,266	+ 0.4	9.1
⑦ フ ラ ン ス	1976	101.9	+ 1.9	千人 124	+13.8	934	+11.2	4.3
	1977	101.5	- 0.4	104	-16.1	1,072	+14.8	4.8
	1978	99.9	- 1.6	87	-16.3	1,167	+ 8.9	5.2
	1979	98.2	- 1.7	88	+ 1.1	1,350	+15.7	6.0
	1980	97.0	- 1.2	89	+ 1.1	1,451	+ 7.5	6.4
	1981	93.6	- 3.5	69	-22.5	1,773	+22.2	7.8
	1982	92.1	- 1.6	84	+21.7	2,008	+13.3	8.8
	1983	90.0	- 2.3	80	- 4.8	2,042	+ 1.7	9.0
	1984	87.5	- 2.8	46	- 4.5	2,310	+13.1	10.1
⑧ イ タ リ ア	1976	100.3	+ 0.3	...	...	1,426	+15.9	6.7
	1977	105.3	+ 5.0	...	...	1,545	+ 8.3	7.2
	1978	103.8	- 1.4	...	...	1,571	+ 1.7	7.2
	1979	104.4	+ 0.6	...	...	1,698	+ 8.1	7.7
	1980	105.0	+ 0.6	...	...	1,684	- 0.8	7.6
	1981	102.9	- 2.0	...	...	1,895	+12.5	8.4
	1982	100.5	- 2.3	...	...	2,052	+ 8.3	9.1
	1983	...	...	...	...	2,264	+10.3	9.9
	1984	...	...	...	...	2,391	+ 5.6	10.4

注 (1) 米国の求人数は51都市における新聞求人広告指数 (1975年=100)。

(2) イギリスの労働時間および賃金関係計数算出のベースとなる男女別労働者数は1982～1984年分については未詳のため、1981年分を採用。

(3) フランスの失業率は EC Eurastat による。

表 8 政府債務 (年末または年度末)

		政府債務残高				政府債務残高				政府債務残高	
			前年比				前年比				前年比
① 日本(億円)	1972	117,043	+53.9	② 米国(億ドル)	1972	4,493	+ 5.9	③ イギリス(百万ポンド)	1971	35,840	+ 7.2
	1973	131,545	+12.4		1973	4,699	+ 4.6		1972	36,884	+ 2.9
	1974	157,094	+19.4		1974	4,927	+ 4.9		1973	40,458	+ 9.7
	1975	227,952	+45.1		1975	5,766	+17.0		1974	46,405	+14.7
	1976	326,780	+43.4		1976	6,535	+13.3		1975	56,572	+21.9
	1977	460,979	+41.1		1977	7,189	+10.0		1976	67,166	+18.7
	1978	623,399	+35.2		1978	7,892	+ 9.8		1977	79,180	+17.9
	1979	775,540	+24.4		1979	8,451	+ 7.1		1978	86,885	+ 9.7
	1980	950,119	+22.5		1980	9,302	+10.1		1979	95,313	+ 9.7
	1981	1,068,321	+12.4		1981	10,287	+10.6		1980	113,037	+18.6
④ 西ドイツ(百万マルク)	1982	1,213,391	+13.6	⑤ フランス(百万フラン)	1982	11,971	+16.4	⑥ イタリア(十億リラ)	1981	118,390	+ 4.7
	1983	1,372,440	+13.1		1983	14,107	+17.8		1982	127,072	+ 7.3
	1984	1,532,671	+11.7		1984	16,630	+17.9		1983	142,545	+12.2
	1972	55,299	+13.4		1972	86,463	-10.1		1971	11,328	+22.1
	1973	61,356	+11.0		1973	86,321	- 0.2		1972	13,954	+23.2
	1974	72,138	+17.6		1974	95,752	+10.9		1973	18,487	+32.5
	1975	108,502	+50.4		1975	129,548	+35.3		1974	29,055	+57.2
	1976	128,449	+18.4		1976	138,990	+ 7.3		1975	38,521	+32.6
	1977	150,150	+16.9		1977	155,810	+12.1		1976	52,493	+36.3
	1978	177,518	+18.2		1978	196,150	+25.9		1977	69,732	+32.8
④ 西ドイツ(百万マルク)	1979	202,632	+14.1		1979	231,590	+18.1		1978	96,560	+38.5
	1980	232,320	+14.7		1980	278,060	+20.1		1979	127,278	+31.8
	1981	273,114	+17.6		1981	345,750	+24.3		1980	161,501	+26.9
	1982	309,064	+13.2		1982	509,860	+47.5		1981	219,390	+35.8
	1983	341,444	+10.5		1983	652,830	+28.0		1982	282,424	+28.7
	1984	367,297	+ 7.6		1984				1983	367,700	+30.2

注 (1) 日本は大蔵省調, その他は各国資料(巻末の主要資料参照)による。

(2) 日本, イギリスは表示された年の翌年3月末残高。ただし, 日本の1984年は12月末の暫定計数。その他は年末の計数。

(3) 西ドイツ, フランス, イタリアの対外債務は外債の計数。ただし, 西ドイツの1983年は長期債務に含まれる。なお, イタリアの政府債務残高は外債を除く計数。

(4) 日本の長期債務は借入金を, 短期債務は一時借入金を, またイギリス, 西ドイツの長期債務は借入金その他債務を, フランス, イタリアの短期債務に借入金その他債務をそれぞれ含む。

国際比較統計 日本銀行統計局 昭和55年 p. 77 昭和60年 p. 89

第二次世界大戦後続いた安定期を通じて, 農産物の世界的供給過剰気味の傾向による農業不況, さらに, 累積債務国の一層の悪化への危惧や(表6-Cと表8), それらの国のモラトリアム, または, デフォルトへの融資国の不安は, 中南米の

累積債務国に大いに係わりをもつアメリカのコンチネンタル・イリノイ銀行の経営破綻に象徴されるように、一挙に金融恐慌をも引き起こしかねない不安の状況にある。また、ソビエトのアフガニスタンへの軍事介入・ポーランドの労働争議、カンボジア・ラオスの国境紛争と政情不安、イラン革命、イラン＝イラク戦争、パレスチナ問題をめぐる中東紛争、ニカラグアはじめ中南米諸国の政情不安、フィリピンのアキノ氏暗殺での一挙に浮上した政情不安、最近落ち着いたとは言え1997年中国への返還をめぐってのホンコンの経済的困濫、タイのクーデターの失敗、南ア連邦共和国の内紛、等々数え挙げればきりが無い種々の内乱・革命・地域紛争・戦争は、いろいろ起るべく原因は異っていたとは言え、もしかしたらという危機の一層の拡大への不安や、中東諸国の問題が象徴するように、原油供給への影響の危機感や、米ソ首脳による話し合いの成り行きに一喜一憂し、いつ国際緊張が最悪の事態に導かれるか、誠に、当面すぐにでも解決せねばならない状況が世界経済の悪化とともになおも潜在的に普遍している国際環境である。

これら記述してきた諸問題、すなわち、①累積債務国問題、②各地域での内乱・革命・紛争・戦争、③一部主要先進国での金融市場の活況、④農業不況、⑤保護貿易主義思想の台頭、⑥世界同時不況と高失業率等は、1930年代の世界恐慌への再現の可能性への危惧を余儀ないものとしている。このような世界経済に当面する深刻な問題を憂慮し、解決策を熟考する時に、その淵源を IMF 体制の崩壊に求め、根本的問題の解決は、いかなる国際通貨体制（国際金融機構）の存在が前述したような世界経済への種々な問題を発生させず、国際分業を一層拡大・発展させ、かつ各国の継続的経済成長を促し、物価を安定させ、失業をなくし、さらに国際間の不均衡を生じさせないような理想的国際金融機構であるのかを模索する上で、まず第一に必要な事は、第一次大戦前のイギリスを中心国とする国際金本位制下のポンド本位制を、次に両大戦間の金為替本位制下の中心国イギリス・アメリカの併存時代の国際信用機構を、さらに第二次大戦後の IMF 体制下の中心国アメリカでのドル本位制、また、1971年8月の金兌換停止以降の中心国アメリカについて、それぞれの中心国に成り得るため

の資格・条件について検討し、国際金融機構が円滑に運営されるための諸条件について究明することは、現在の深刻な世界経済における問題解決の原因追求として、また、将来あるべき国際通貨制度の検討のためにも、不可欠な基礎研究と考えている。

第二に、近年の日本の工業製品を中心とする国際競争力の向上に伴い、大幅な貿易収支の黒字の累積は、西欧・アメリカを中心に大きな貿易摩擦問題を引き起こし、日本に対して“物と金(カネ)”の両面からの迅速な自由化を迫るものであった。1984年6月に始まる日米円ドル委員会は、日本の金融市場の解放と円の国際化を広く求めるものであり、1858年江戸幕府大老、井伊直弼との間で結ばれた日米修好通商条約の締結以来の日本の大幅な各種規制の撤廃、緩和を求め、開国(自由化)を迫るものであった。これまでに東京市場の国際化については、大いに有望視されており、そこでの最大のネックを各種規制の存在が指摘されており<sup>(2)</sup>、国内外からの要望と我が国の経済情勢の変遷に伴う自由化への必然性は、いつどのような型での我が国金融市場の国際化の実現について大いに議論が交わされているところである<sup>(3)</sup>。このような状況下で、東京市場がニューヨーク・ロンドンに次ぐ国際金融市場として信認を広く得て、円が国際通貨として広く利用されるようになるためには、第二次大戦後中心国としてのどのような資格と条件を達成しつつも、今後どのような諸条件を充足する必要があるかを検討する上にも、大切な一考察と考えている。

第三に、国際収支の経済発展段階によるパターンにも指摘されているように<sup>(4)</sup>、日本の貿易収支の大幅黒字の継続も、遠からずして発展途上国の低賃金と、最新鋭近代設備での工場生産を通じてのキャッチ・アップで、国際競争力の後退は、一部繊維部門や鉄鋼製品での中国・韓国・台湾に脅やかされている昨今の現実をみても、将来を憂うものである。また、相手国の雇用機会の喪失を伴う貿易収支の大幅な黒字累積は、各国で貿易摩擦をもたらすものであり、さらに、公害の発生や社会資本の充実のために、厳しい国・自治体の規制や高率の課税制度の採用は、企業の現地生産・多国籍企業化への道を進展させ、将来、貿易収支の赤字、貿易外収支の投資収益収支を中心とする黒字への移行に

進んで行くものと考えられる。このような状況の中で、資本の流出入の一層の拡大は必至であり、我が国金融市場の解放・円の国際化への検討は重要であると同時に、よりもっと将来先発国イギリス・アメリカが経験したイギリス病と言われる中心国の衰退の風潮が、また、我が国にも遠からず押し寄せてくることが必至であるならば、中心国として永遠の繁栄を謳歌し続けるためには、中心国としていかなる諸条件を堅持し死守しなければならないかを考察する上でも大変意義あるものと考えている。

### 引用文献

- (1) 第一次大戦前の国際金本位機構としての一面をみると、国際金本位制は実際上は、ポンド・スターリングによるポンド本位制であった、という主張は多くの著書で述べられている。

W.M. Brown; The International Gold Standard Reinterpreted 1914-1934 AMS Press 1970 vol.1 p. 133

金原賢之助『三田学会誌』慶応大学 昭和15年第34巻10号 p. 187

馬場宏二『帝国主義研究』2 世界経済 青木書店 1981 p. 85

堀江薫雄『国際通貨基金の研究』岩波書店 昭和43年 p. 3

加瀬正一『国際金融問題を解く』有斐閣 1984 p. 30

長 幸男『昭和恐慌』岩波書店 1984 p. 207

- (2) W.M. Clarke; London as a World Financial Center

山中豊国訳『シティーと世界経済』東洋経済新報社 昭和50年 p. 212

- (3) 金融ジャーナル1985年7月号 金融ジャーナル社

- (4) C. Kindleberger, International Economics, Richard D. Irwin, Inc., 1953 p. 367

### A. 国際金融機構が運営されるための大前提条件

国際金融機構はある特定国の通貨を国際通貨として、国際間の決済・貸借を手形・小切手・振替操作などの信用手段によって、中心国の金融市場で集中的に行なわれるという国際信用機構が円滑に運営される条件は、世界の社会情勢が、市場参加者同志の信頼しあえる状況がこれまでずっと続いてきた如く、将来もずっと続くということが、信用機構成立での前提条件である。貿易・貿易外取引であろうと、資本取引であろうと、そこには必ず信用の授受が伴うものであり、信用を供与する前提条件は、将来信用秩序を乱すようなことが起こらないことであり、言い換えれば今日まで続いてきた平和で安定した秩序が明日



以降も続くことと確信が得られなければならない。もし万が一、そのような事件・事故が起きる可能性が危惧されても、中心国の政治力・経済力・軍事力により、また、周辺国の協力を得て大事に至ることなく解決されるであろうとの確信のもとでの国際間の取引での信用供与を可能にするのである。ひとたび国際間で信用秩序を乱すような内乱・革命・地域紛争・戦争・累積債務国のモラトリアム等々が起った場合には、中心国をして国際信用機構の中で、信用手段により国際間の決済・貸借が処理し得なくなるのであり、そこには各市場の閉鎖を導くであろう。信用機構の存続に一番重要なことは、今後も世界の秩序と平和が維持されるであろうと中心国をして、市場参加者の暗黙的確信が必要となる。

## B. 中心国の資格と条件について

国際金融の中心地になるための資格について、マクドフはプレオブラチェンスキーの「新しい経済学」の著書より引用して、「歴史的にみると、通貨の独裁権は、一定の時期に、世界貿易や世界経済において支配的な役割を演じた国家に属していたということを想起するのは興味あることである。」<sup>(1)</sup> そして、クラークは、「歴史的にみれば、富は過去三世紀にわたって西に移動し、すなわちイタリア都市国家から北ヨーロッパに向かい、オランダを通過して一九世紀にはイギリスに、二〇世紀にはアメリカ大陸へと移動するにつれて、指導的な金融センターもまた西に移動したのである。ゼノア、フロレンスおよびルッカは一六世紀と一七世紀に、ハンブルクとアムステルダムは一八世紀に、ロンドン（パリおよびベルリンとならんで）は一九世紀に、そしてニューヨークは二〇世紀となっている。支配的な経済が支配的な通貨と支配的な金融センターをつくり出す。」<sup>(2)</sup> としている。両者とも中心国の地位確立のためには、世界経済において、支配的地位の確保、すなわち絶対的優位のもとでの主導権の掌握を意味している。それでは、その主導権を得るための必要な条件については、マクドフは、第一次世界大戦前のイギリスが成り得た原因を、「七つの海の制海権、世界最大の商船隊、世界最大の植民地帝国、国際貿易の制覇によって支えられ

ていた。」<sup>(3)</sup>とし、また、エビットは、同じくロンドンが戦前成り得た主因を要約し、「一部は偶然に負うものであり、他は英国の国民性によるものである。」<sup>(4)</sup>としている。また、クラークは、「問題となるのは顧客への便利さである。外国の業者、投資家あるいは製造業者が、各自の欲する便宜を見つけることがいかに容易であるか、各自がそれを利用することがいかに便利であるか。またいかに安全にその便宜は提供されるか。」<sup>(5)</sup>としている。マクドフは、イギリスが中心国になるのに、世界の支配権をどれほど獲得したかを強調し、また、エビットは、イギリスの中心国に成り得た根本的原因を記述し、そしてクラークは、中心国が信認を得るためには、どれほど多くのファシリティを提供しなければならないかを説いている。さらに、ブラウンは、中心国になり得るための機能を、「いかなる市場も国際金融センターと成るためには、商品・サービス・有価証券の国際取引のための市場を提供する能力の機能と、外国人に長短期間の信用を提供することを可能にする機能を持っている。これらは、そのようなセンターの基本的なサービスである。」<sup>(6)</sup>としている。ここでいう中心国が十分なファシリティを諸外国に提供するのに、どのような条件が用意されなければならないかについては、クラークは、「国内及び国際通貨が自由に流出入できるところ、貿易のための資金を見付けることができ、また、産業のための資金を見付けることができるところ、また、外国の商人、貿易業者と製造業者が、取引に必要な幅の広い便宜を見付けることができる場所」と同氏が以前著した小冊子での記述を、「これは都合よく、山羊から羊を分離している。それは、新しいオフショア・センターを除外している。それは、いくつかの十分な名声のある場所の主張に疑いをかけることにすらなる。」とし、新しくポール・アインテッヒの記述を引用し、「(1)対外貸し付けに利用できる豊富な資本資源、(2)十分な銀行組織、(3)金融市場の自由、(4)喜んで外国証券を獲得し、保持する一般投資家、(5)安定した通貨、(6)すぐれた貨幣市場、(7)すぐれた外国為替市場であるとし、政治的安定性も付け加えることを言い添えている。」<sup>(7)</sup>また、1985年10月7日付、日本経済新聞の武市特派員も、「二つの世界大戦を経て英国は世界経済の盟主の座からすべり落ち、かつての栄光の通貨であるポンドは単な



るローカルカレンシーに転落した。経済が栄えるところに金融市場が発達するというのが正しいとすれば、シティーの繁栄は説明がつかない。いまもなおなぜ金や人がシティーに集まるのか。」と、歴史の変遷により、中心地の必要な条件が変わってきたのか、それとも、中心地を取りまく世界情勢の環境が、中心地の必要とする条件を変えたのか、それとも、もともと中心地の資格・条件は、あれこれ総てを用意する必要はなく、主要項目のいくつかを用意すれば足りたのか、それとも、中心国として諸外国により広く利用されるには相対的な問題であり、他のどの国よりもより一層必要十分条件を備えてさえいればよいのか、深く検討することは大切である。しかしながら、ここでは中心国に成り得るための推測される諸条件の総てを挙げ、分類・記述し、将来、前書きで示したような、現実の問題解決への考察のための予備的・基礎的研究にしたいと考えている。そこで、表9のように、国際金融機構が、中心国をして円滑に運営されてゆく国際信用機構の条件は、A. 大前提条件、B. 中心国の資格条件、C. 周辺国の協力に大きく三つに分類されるが、ここでは特に、中心国の資格・条件に焦点を当て、中心国の資格をア、政治的安定と軍事的優位、イ経済的要因に分け、さらに経済的要因として、1. 経済力の優位、2. 経済規模の優

表9 国際金融中心地の資格条件 (国際信用機構が円滑に働くための条件)

A. 大前提条件

B. 中心国の条件	ア. 政治的要因	
	イ. 経済的要因	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 経済規模の優位</li> <li>2. 世界経済における支配権 (決定権)</li> <li>3. 収益力</li> <li>4. 対外決済手段の巨額な保有</li> <li>5. インフラストラクチャーの整備</li> <li>6. 各種規制の緩和・撤廃</li> <li>7. 自然条件</li> <li>8. 通貨の問題</li> <li>9. 妥当な経済政策</li> <li>10. 市場の性格</li> <li>11. 各種市場の発達</li> </ol>
	ウ. 軍事的要因	

C. 周辺国の協力

位, 3. 各種市場の発達, 4. 各種規制の緩和・撤廃, 5. 妥当な経済政策, 6. インフラストラクチャーの整備, 7. 自然条件について, 8. 中心国の国民性, 9. 通貨の問題に分け, それぞれを記述する。

### ア 政治的安定と軍事的優位

国際信用機構が円滑に運営されるには, 中心国が世界の銀行としての機能を果たさなければならない。そこで, 中心国の信用機構が幾分でも不安・不信を買うようなことがあってはならないし, 中心国の政治力により, 世界情勢の国際信用機構を脅やかす諸要因に対して, 沈静化し掌握する能力が要求される。対内的には, 政党間の政権の交代がなく, あっても政策に大きな変更がなされないことが大切である。いわゆる中心国の政策は, 継続性を信頼し, それらを前提条件に諸外国が中心地として選択しているのである。政争・クーデター・内乱・革命などの危惧の存在は論外である。また, 自国にそのような恐れは全く存在しなくても, 地球上のある地域での紛争や内乱・革命・戦争は, 国際信用機構の破綻に大きな係わりを持つことが多いので, これらを解決に導くための主導権と関係国を説得させるための影響力が必要となる。

これら政治的安定は, 日本経済新聞1985年10月7日付武市特派員によると, 「イギリスがソ連との間が海で隔てられているという地理的条件が, 共産党が政権を担う可能性は今のところ皆無であり, 欧州人などには一種の安心感を与えている」。と, イギリスの政治的安定を地理的条件が助けている事を説明している。信用取引は人間の信頼を基礎とするものであり, いかに信頼される市場になるかは, 中心国が, 外国より信頼され得る政府を持ち, 内外共に国際信用機構の秩序維持のため, 平和で安定した世界情勢を守る政府が必要である。加瀬正一氏は, 「一国の中で, その国の通貨が喜んで用いられる場合にも, 社会の平和, 国民経済の健全な運営が前提にならないのと同様です。ところが国際間には超国家的な権力主体がないわけですから, 世界平和を保つには, それら特定国の政治的実力が必要となります。言い換えれば, それらの国の他国に対する政治, 軍事的優位が必要となるわけです。」<sup>(8)</sup>と説明している。

また、同氏は中心国の通貨について、「その通貨が安定しているという根本条件を満たすためには、その通貨の背後にある国力が必要であり、国際間におけるその国の卓越した地位が必要です。この場合、国力とは、単に経済的な実力ばかりでなく、政治力、軍事力、さらには道義力まで、これに加えるべきでしょう。ポンドの時代には、イギリスの実力、リーダーシップがものをいっていたのであって、これによって得られた「イギリスの平和」が必要でした<sup>(9)</sup>。」と説明している。

また、軍事力については、国民の圧倒的支持のもとに、安定した政権を維持し、恒久的な国際信用機構の円滑な運営を考慮しつつ、中心国として種々の政策を遂行することとなる。ところが、その政策の決定、遂行に当り、それを好ましくないと考える諸外国によって、妨害・干渉・圧力・脅迫・介入・挑発などで、大きく動揺したり、政策の変更を強いられたりすることのないよう、自国への影響力を排除するために必要とするばかりでなく、中心国をして信用機構の円滑な運営を乱すかもしれない恐れのある事柄については、それが自国以外のところで起った事件であっても、それを抑止し、解決させるために中心国自身が諸外国へ妨害・干渉・圧力・脅迫・介入・挑発できる能力を保有する必要がある。国際舞台において、中心国の軍事力の優位は、ある時は、世界の警察となり、同じ主義・思想をもった陣営の同胞を他から守り、また、同じ同胞内での争いには、調停・仲裁等の裁判官としての役割を果し、国連に安全保障理事会が存在すると雖も、その重要性は、国連のそれとは比較にならないほど重要であると言えるであろう。いずれにせよ、軍事力の優位については、自国を世界経済の中心国としての地位を確保・維持させ、その役割を果す上で、それを妨害する何ものをも許さず、また、その信用機構の円滑な運営の継続に脅威を与える何ものをも排除し、同胞を助け、同胞からの信頼を勝ち取るためにも必要な武力であり、実際上の行使の有無は別として、優位を誇ることでそのような事が可能となるので、重要な要因である。マクドフは、「世界通貨としてのドルは、アメリカの経済力や軍事力があってこそはじめて可能になる<sup>(10)</sup>。」と説明している。

## イ 経済的要因

### 1 経済力の優位

マクドフが記述のとおり、中心国は世界貿易や世界経済において、「支配的な役割を演じた国家に属していた、……<sup>(1)</sup>」というとおり、中心国になるためには、政治的・軍事的優位だけでなく経済的優位も確保しなければならない。そのためには、ファンダメンタルズを良好に保つ必要がある。これには産業上の国際競争力での優位を保ち、経常収支での黒字を維持し、さらに、対外決済のための準備資産の大きさ、また、中心地の経済力の諸外国への影響力、支配力が絶大であることが中心国としての信認を不動のものにすることになる。すなわち、個人におきかえれば、所得能力と過去から現在に至るまでの保有資産額であり、また、職業上での地位や発言力の大きさは、個人の経済力の信認の程度への尺度としての要因と同じことと考えられる。

イギリスの場合は、「19世紀中葉には自由貿易運動が展開される。このときイギリスは、綿工業を代表的な資本家的産業とする工業国として、他の諸国を農業国の地位におくことによって国際的な分業を展開するわけである。すなわち、イギリスは世界の工場として、イギリスの産業資本家を独占的地位にたてることができたのであるが、農業諸国はまた農産物を輸出しイギリスの工業製品を買入れ、国内の開発に努めることとなった<sup>(11)</sup>。」としてイギリスの工業国としての独占的地位を示し、バロッフは、「ロンドンが国際経済の中心となるにいたったことは、イギリスの帝国主義強国としての貿易上の優位と、機械制大量生産の創始者としての産業上の指導力が基礎となっていた。ロンドンが短期・長期金融の世界の中心地となることができ、さらにその地位を強化したのは、この二重の優越性によるものであった。金本位制の操作は利潤の源泉となり、イギリスの国際収支の維持に積極的に作用した<sup>(12)</sup>。」と国際競争力の優位と、貿易上の優位を説明している。また、「イギリスの世界貿易における有利な立場は、海上輸送および、保険取引の有利な立場と相まって、イギリ

スを長期にわたり、世界の債権者としてきた。支出を上回るこのような貿易収入は英国に他国へ貨幣を貸し付ける余力を与え、そしてそのような貸付けの代り金は金で引き出されることはほとんどなく、通常は商品または役務の形で終局的に引き出されるので、英国の貿易を増加せしめた。同時にまた、英国に支払うべき利息の額と貸付資本の返済分だけ英国の年間収入を増加せしめるという二重の効果をもたらしたのである<sup>(13)</sup>。」

以上の如く、イギリスの産業革命達成の先進性に基づく産業上の優位な立場は、貿易上でも有利な位置を占める結果となり、そのことがまた、運輸、保険をはじめとする各種の商品取引所の発達を促し、また他方、イギリスを巨額な債権国に至らしめた。逸早い各種の商品取引所の開設は、時の経過に伴い、世界経済の拡大が進めば進むほど、ロンドンの商品取引所における価格決定は、その他の後発諸国での取引所価格に大きく影響を及ぼす主導権・支配力を持つに至った。さらに、「国際収支の恒常的黑字国であったイギリスが、その資金を他国に貸付けることによって国際的アンバランスを調整してきたことが、金本位制度の活動を支える基盤であった。最強国イギリスがよき債権者としてふるまったことが国際金本位制度の円滑な運行を可能としたのである。その意味で、国際金本位制度はポンド本位制度であったといっても過言ではない<sup>(14)</sup>。」としている。すなわち、貿易上の有利な立場を利用して一層の貿易の拡大のために輸入業者に信用を供与し、独特の手形引受け業者や割引き業者を生み、資金の巧みな運用の技術を修得してゆき、それに伴う必要な情報を世界各地から収集する方法も会得したものと考えられる。いずれにしても、マクドフが指摘のとおり、「世界の金融の中心地になるためには、もちろん貿易の中心にならねばならない<sup>(15)</sup>。」産業上の優位が貿易上の優位をもたらし、それが貿易に伴う海上輸送・保険をはじめ、各種の商品市場の発達と信用供与の技術を高め、一層の諸外国との相互依存関係を緊密にし、中心国としての地位を確立することになる。

## 2 経済規模の優位

まず第一に、金融市場に於ける資金の投資対象が豊富であり、規模が大きい



ため、他の国にとって耐え難いような規模の資金移動も、この国にそれほど大きな影響を与えず、当局が、資金の動きが及ぼす影響を望ましくないと判断した時には、十分な対外準備と国内資産とで、相殺を操作するに有効なる機能を保有していなければならない。すなわち、国際資金移動が国内市場に及ぼす影響を吸収するためにその国の金融市場が大きく、経済力が強大である必要がある。そして、経済規模が大きいことは、余資運用・調達を提供する機会が増える可能性をもたらす。そして、何よりも規模が大きいということは、対諸外国との関係で、相互依存関係が大きいことを意味し、周辺国に中心国をして、国際間の経済取引に伴う決済・貸借をここで集中的に行なうのに種々の便宜を提供することになる。また、規模が大きいことは、対外的影響を遮断する効果をもって、一層の規制の緩和・撤廃や市場の解放を可能にする。

経済規模は、1. その国の国内総生産高（GDP） 2. 対外国との相互依存関係を表わす輸出入高 3. 政府の市場への参加者としての影響力の限界を表わし、また政府の自由裁量権の大きさを示す財政規模 4. 内外からの資金の流出入で、運用・調達の場合として、また、世界の銀行としての活躍の舞台となる金融市場の規模の大きさ 5. 諸外国からの信認を高め、中心市場の利用と中心国通貨の使用を一層高める中心国の経常収支の規模 6. 繊維、穀物、熱帯産品、非鉄金属、貴金属、石油、通貨、金利、証券の各種商品取引所の種類と規模と集積度は、中心国のファシリティーの提供の度合いを意味し、諸外国が自ら進んでその場所の利用を必然とする。

以上の如く、経済の各種の規模の大きいことは、一つに諸外国からの信認を高めるのに役立ち、二つに一層のファシリティーの提供を可能にし、三つに対外からの影響を遮断するのに大きな効果を生むこととなる。このような意味では、「ロンドンでは、国際取引において、依然として、他のいかなるセンターよりも大きいことを誇っている。それはとくに、保険、海運、株式取引、ユーロ・ドル取引およびそこで営業している外国銀行の数においていえるのである<sup>(16)</sup>。」と主な取引所でのロンドンの優位を示しながらも、また、「ニューヨークが、有価証券の最大かつもっとも競争的な市場の提供においてとび抜けた位

置を占めており、ロンドンはその重要性において問題なく第二位であることは明らかである<sup>(17)</sup>。」と第一次大戦後、一部優位をニューヨークに明け渡したことを指摘している。

### 3 各種市場の発達

国際金融の中心地として諸外国から喜んで利用されることは、そこに沢山のファシリティーが容易に見つけられるからであり、そのファシリティーの一つに、そこには多くの原材料の需給を反映し、合理的相場をつけることのできる商品市場、商品の輸送を可能にする海運市場、商品に対する金融や保険をつけるための銀行や保険会社の金融取引市場、あらゆる国が、公債を募集することのできる資本市場、等の各種の便宜を提供できる市場の存在が、金融中心地になることを可能にするのである。このことが、取引に必要な運転資金を中心国に保有する傾向を強め、中心国は、少ない準備で多額の対外金融供与の豊富な資金を保有することとなり、また、銀行家や貿易実務家に資金運用の技術を修得するのを助けた。ブラウンは、イギリスの金融市場の中心地としての地位確立に、「ロンドン金融市場のすばらしい機構は、大英帝国の国際経済上の地位の結果である。ロンドンや他の二・三のイギリスの都市では、世界の最も重要な商品市場のいくつかを見い出せる。たとえば、綿布のマンチェスター、穀物のリバプール、金属のロンドンのように。世界の重要ないかなる商品も、これら商品市場で容易に出会いをみつけることが出来、その取引は、ロンドン金融市場を通じて融資される。普通の場合、多額の世界の商品は、ポンド建てで値段がつけられる、という事実は、多額のポンド手形を創造し、世界中の重要な商人は、ロンドンで金融関係を維持する必要がある。イギリス海運は、世界的であり、商船の運行は、ポンド手形の継続的供給を作り出す。さらに、他の国々の海運手形 (shipping bill) もしばしばポンド建てで作成される。イギリスの保険会社は、世界中で営業し、これらの国際金融取引は、ロンドン金融市場の活況に貢献している。それゆえに、金融センターとしてのロンドンの強さは、基本的には商品やサービスの回転に基づいており、ニューヨークの市場が有価証券の出来高に大きく基づいているのとは異なっている<sup>(18)</sup>。」以上の如く、中



心地は各種取引所の存在が混然一体となってより大きなファシリティーを提供する能力を増し、そのことが、諸外国の利用を促し金融面でも世界の銀行としての立場を確立するのを容易にするのである。ちなみに、ロンドンには、海外の銀行の進出は、1984年末で470を数え、世界第一位であり、「ロスチャイルドの金塊市場では、ごく最近まで世界の金取引の四分之三を取扱っていた。また、ロンドンの保険市場は、有名なロイズ保険組合と大保険会社によって、あらゆる世界中の保険が引受けられ、ロンドン保険市場の収入のおよそ半分は海外取引から入ってくる、とされている。また、外国為替市場バルチック為替市場も世界の相場への支配力を有し、その影響力は絶大である<sup>(19)</sup>。」また、「国際金融、証券、外国為替、保険、金、非鉄金属、石油、一次産品、海運など、いずれも世界最大または一、二位を争う国際取引所とその自由市場が、ここに集積しているのである<sup>(20)</sup>。」以上の如く、中心地には、各種金融市場が広範囲に存在し、補い合いながら機能していることが重要である。

#### 4 各種規制の緩和・撤廃

まず第一に、居住者、非居住者を問わず、市場の利用が自由に解放されており、資金の内外の流出入の自由を認め、また、外国の金融機関、証券会社等の活動の自由を認め、「高率の準備率の適用や、付利禁止、逆金利の徴求<sup>(21)</sup>」などを非居住者預金に適用しないことが大切である。政府が市場への規制や干渉をすることを出来る限り避けることは、吉野昌甫氏が言う「取引の対象となっている物の値段は需要供給の法則によってのみ決められ、金融市場における資金の流れは、金利機能によってのみ規定されることになる<sup>(22)</sup>。」このことは、効率のよい市場を保証し、適切な金利により資金の需給に反映した市場を意味し、資金の調達希望者にとっては、安い金融コストを約束し、余資運用者にとっては、合理的な運用利回りを保証してくれる場所となる。このことは、世界中からより一層効率的に運営されている中心地の市場に魅力を感じ、さらに一層利用を促し、そのことがまた中心地への預金誘引力 (deposits-attracting power) や、運転資金などの預金強制力 (deposits-compelling power<sup>(23)</sup>) を強め、中心国の諸外国への長期・短期資金の提供能力を増し、一層世界の銀行家としての地位を確実

なものにすることになる。次に、非居住者に市場が解放されているということは、非居住者であることを理由に、差別待遇をすることがないということであり、1. 非居住者の営業活動の自由、2. 税制面での居住者との平等な適用、に分けられよう。非居住者の営業活動の自由については、特に、外国銀行・証券会社の営業活動の自由を保証することが、世界中の余資が中心地をして世界各地に資金循環されるファシリティーの機能の一層の効率を高め、また、貿易金融に伴う短期資金の供与を通じ、一層の貿易取引を拡大するのを助ける。また、各種課税制度の適用が国内外平等であることはもちろん、低率であることが中心地を繁栄させる大きな要因となる。このことについてクラークは、「銀行は貸付けを取りまとめ、通貨を転換し、借り手と条件について話し合い、最後に、通常税金対策のために、一つの、あるいはそれ以上のセンターを通じて記帳がなさなければならない<sup>(24)</sup>。」と課税に悩む企業家は、より安い税制の金融市場を利用することを促す。安い税率は、安いコストを意味し、取引での優位さを保証する。さらに、税制以外に預金準備率の高低や各種手数料の規定、貿易取引での自由、低い関税率、金(キン)の持ち出しの自由、内外での各種金融商品の発行の自由などは、いずれも国内金融政策の効果を弱め、各国に固有の規制の効果を弱めるであろうと推測できるも、効率のよい市場を約束し、市場参加者を増やし、ファシリティーの提供を一層向上させるものとなり、それらが重複して世界の銀行としての地位をさらに不動のものにするであろう。ちなみにイギリスの場合、田尻嗣夫氏は、「すでに一千年近く、歴代の英国王が自由市場としての特権を与えてきたシチーには、現代の英政府も介入しえない歴史の重みと、国際的な信頼がある。国際政局をビジネスに織り込みながらも、政府介入は許さないシチー独特の哲学こそ、この街で市場原理が最も効率的に発揮される最大の理由である<sup>(25)</sup>。」と述べている。また、1985年10月7日付日本経済新聞は、「シチーの独立性と自由な市場について」「シチーはロンドンにあってロンドンにあらず、英国にあって英国にあらずといわれる。エリザベス女王が公式にシチーに足を踏み入れるには、ロード・メイヤーと呼ばれるシチーの市長が入り口まで出迎え、シチーの剣を女王に手渡す。剣を持

つことによって初めて女王がシティーに入ることが認められるという儀式である。……こんな儀式が現在でもなお続いているのは、シティーは英国王室の権力が及ばないところ、つまり、英国がシティーの自由、独立性を最大限に尊重しているという意思の表示である。……また、シティーの自由について、シティーで働く国際金融マンは『ここは驚くほど自由な市場だ』と口をそろえる。自由の金融・資本市場に比べて行政当局の規制、介入が極端に少ないためである。」と79年秋に実施された為替管理の撤廃で、国際、国内市場が一体化した金融市場を強調している。また、最後に「自由を尊重する気風が、シティーの繁栄の大きな原動力となってきたことはまちがいない。」と結んでいる。

#### 5 妥当な経済政策

世界の銀行として、諸外国から信頼を得て、また、諸外国が要望する中心国としての役割を十分果たすためには、まず国内の健全な経済政策の遂行が大切である。それは、中心国の継続的経済成長であり、物価の安定・完全雇用のほぼ達成であり、財政収支が均衡しており、国際収支も好調を続け、対外的準備資産も豊富に用意されており、経済的側面においては、諸外国から信頼し得るに十分な国内の経済情勢をもたらすべく妥当な経済政策の運営が大切である。

次に、対外的には国際信用機構の中心国として、諸外国にとって種々の便宜をどれほど沢山提供し得るか、それを可能にするような妥当な政策の運営が必要となる。すなわち、諸外国によって中心国の各種取引所の利用を促進させるべく非居住者の市場への参加をできる限り自由に解放することであり、また、利用に伴う徴税制度は、できるだけ低率、または、徴収しないことが大切であり、できるだけ政府機関の市場への干渉、介入を避ける政策が必要である。そのことは、より一層多くの非居住者の中心国市場の利用を促し、一方では、運転資金 (working Balance) として在外資金の中心国への保有を高め、それは中心国が諸外国に短期・長期資金を供給するための助けとなった。他方、規制・干渉をしないことは、市場を効率のよい需給を十分反映し、資金の流れは金利の高低によってのみ反映する市場を創造し、資金を調達する側にとって、より安い金利でいつでも、容易に、迅速に、必要な期間、必要な金額を調達するこ

とを能可にする市場を作り上げ、また、資金を運用する側にとっては、より安全・確実に流動性に富んだ一定の金額を、一定期間、余資を運用する場所を提供することになる。このように世界中の取引に伴う短期資金や取引と関係ない長期資金の調達場として、また、世界中の余資が高度に発達した市場を求め、流入して来ることが大切であり、また、最終的に資金の流出入を安定に保つべく、割引歩合政策・公開市場操作等の妥当な金融政策を遂行する政府または通貨当局の手腕と技量の適切さが重要となる。すなわち、世界の中央銀行としての役割を果たすための手腕と技量を持たねばならない。

第一次大戦前のイギリスの場合、長幸男氏は、「国際収支の恒常的黑字国であったイギリスが、その資金を他国に貸付けることによって国際的アンバランスを調整してきたことが、金本位制度の活動を支える基盤であった。最強国イギリスがよき債権者としてふるまったことが国際金本位制度の円滑な運行を可能としたのである。その意味で、国際金本位制度はポンド本位制であったといっても過言ではない<sup>(26)</sup>。」と政策の妥当性を強調している。また、吉野昌甫氏は、「第一次大戦までの金本位制時代には、イギリスはポンド残高を十分にカバーしうる膨大な対外短期資産をもっていたため、イングランド銀行は巧妙な公定歩合操作により、わずか数千万ポンドの金準備で金本位制を維持してきた<sup>(27)</sup>。」としている。また、堀江薫雄氏は、第一次大戦前のイギリスが中心国になり、ポンド本位制がうまく機能した諸条件の中で、その一つに「イギリスが他に先がけて逸早く金本位制を採用し、しかも、その金本位制が極めて典型的なものであった。……ポンドは、完全に金交換が可能であった。ポンドはすなわち、一定量の金を意味し、且ついかなる対外支払いにも無制限に使用できた。ところが、他の国々においては、形式的には金本位であっても、実質的にはそれは若干の制約を伴うのが常であった。……加えて、イギリスには他にみられない特色として、ロンドン金市場というものがあった。……金の市場価格と外国為替相場とは、全く相互依存関係に立つことになり、一方、イングランド銀行が一定価格で無制限に金の売買に応じる限り、金相場そのものは極めて安定的である<sup>(28)</sup>。」以上のように、イギリスがどの国よりも一層の完全な形

での金の兌換・輸出入の自由を保証する政策を施行し、且つ、ロンドン自由金市場を存在せしめ、なお且つ、イングランド銀行のバンク・レート政策によって補われ、ポンドへの需給関係を安定させる政策を遂行したことが世界の銀行として大いに信望を集め、十分以上の便宜の提供を可能にしたと言える。そして、IMF 体制におけるアメリカの政策の不適切さを、ポール・アインチッヒは、「1968年3月から1971年8月まで、ドルは理屈の上では諸外国政府や中央銀行に対して金交換性を保持していると想定されていたけれども、実際にはアメリカにもしある中央銀行がアメリカを困惑させるほど巨額の金交換を求めるならばこの義務履行を拒否するであろう、ということは共通の認識であった。……ということと、他方、ニクソン氏がインフレ抑制によるドル防衛の必要よりも選挙上の考慮に優先権を与えたように見えたことであった。彼がアメリカの賃金インフレの昂進にもかかわらずデフレ政策を逆転させた時に、ドルは準備通貨の役割を引き続き演ずるのに明らかに不適格になった。それは、歴代のイギリス政府がポンド防衛よりも選挙民への迎合に優先権を与えることによって、ポンドを準備通貨として不適格にしたのと同じやり方であった<sup>(29)</sup>。」と政策の失敗がドルを準備通貨としての地位を後退させたことを強調している。

以上の通り、世界の銀行として何よりも諸外国から信頼を得るべく中心国自身の健全な経済の運営が大切であり、次に諸外国によって喜んで中心地の各種市場を利用されることを促進させるための合理的な市場の運営の技術と政策が必要となる。

## 6 インフラストラクチャーの整備

国際金融の中心地の地位確立のために、また、世界の銀行としての機能を果たするためには、自由を尊重する精神で、国際分業を積極的に促進させるために、貿易・貿易外取引や長期・短期の金融取引を盛んに行なわなければならない。そのことは、中心地に各種の取引所が発達することであり、その取引所の発展と市場で需給を反映した他のどの市場よりも、合理的価格が迅速に成立するためには、各市場それぞれに専門知識を修得し、長い経験のもとに習熟した人材が、世界中からの情報を適切な判断のもとに市場を円滑に運営し、需給を調整



することが重要である。このことは、一つには各種取引所を円滑に運営するための熟練をもった人材の必要であり、他には世界中から必要な情報が瞬時に得られることを可能にする高度技術革新に支えられた通信情報網の整備に関する事柄である。

人材については、例えば、LME（ロンドン金属取引所）では銅・すず・鉛・亜鉛・銀・アルミ・ニッケルなどを取扱い、そこでの売買は、世界の先行きの景気の動向への適切な判断や、供給先での突発的事件・事故などの予測が需給動向に大きく反映し、GAFTA（穀物飼料取引協会＝バルチック商業海運取引所）＝小麦、大麦、ポテトや、LCE（ロンドン商品取引所）＝粗糖、白糖、ココア、コーヒー、ゴム、パーム油、大豆油や、世界の金取引の最近まで四分之三を取扱っていたと言われている<sup>(30)</sup>。ロスチャイルドの金塊市場などは、世界の景気の先行きの動向により、また、適確な気象予測のもとに穀物類の作況を適確に判断せねばならないし、また、有名なロイズ保険組合業者をはじめ、大保険会社は、いかなる保険をも引受け、長年の経験に基づき、適確な事故率を算定し、アンダーライターとして全世界的に係わりを持ち、ロンドン保険市場の収入のおよそ半分は海外取引から入ってくる、とされている<sup>(31)</sup>。また、外国為替市場では、熟練したディーラーが相場の先行きを適切に判断しなければならないし、債券市場では、景気の動向への予測を通じ、マネーサプライや金利の騰落への適確な判断が要求される。これら各市場に必要な多数の人材の上に、適切な判断のための情報の提供が重要である。情報は、瞬時に正確に必要な時いつでも入手を可能にする高度情報通信網の情報伝達手段と世界中の隅々に至るまで情報を収集する収集能力に分けることができよう。情報通信網は、ハイテクで象徴される技術革新により伝達手段として達成できても、情報収集能力については、地球的規模でのネットワークが必要であり、その点、イギリスは旧植民地での英国企業の利権が残っている場合が多く、英国人が現地で活躍している関係もあり、ロンドンには世界中からの情報―特に中東やアフリカの情報については、現地にいるよりもロンドンの方がよくわかると言われる<sup>(32)</sup>。「情報は金なり」と、言われる昨今、その収集能力と伝達手段の一層の向上は、熟練した多数の人材



とともに中心地にとって重要な要因である。

## 7 自然的条件について

これについては、中心国の地球上で位置する地理的条件として、「十八世紀から十九世紀にかけては、新大陸の開発が世界経済発展の原動力の一つであったが、イギリスはヨーロッパ諸国中、最もこの大陸に近く位置した海洋国家であった。また、同じく徐々に開発が進みつつあったアフリカ大陸は目と鼻の先である。さらに、スエズ運河の開通によって、アジア特に極東方面へのルートも短縮された。旧大陸はもともと至近距離にあることはいうまでもない。ここでは、時代の潮流とイギリスの地理的条件とがたまたま大変よくマッチしていたことが分かるが、これこそイギリスを中心とした世界貿易や資金循環の構造が、理想的に組み立てられ得た根本原因をなすものである<sup>(33)</sup>。」このことは、国際分業の一層の拡大が、中心地の機能を一層増すという前提から、当時の繁栄したヨーロッパ諸国に、近接する位置と、原材料資源の供給先であり、工業製品の需要先に遠くないところにアフリカ大陸が存在したことは、よくいう垂直的分業体制の中心地イギリスの地理的優位さを示している。また、イギリスの場合、わずか1平方マイルという狭い地域に、各種取引所が密集している。すなわち、「歩けばわずかの距離の間に彼が必要とするすべてのサービスを見出し得る、という点で、直接的に重要だけではなく、またシティーの人間同志が知り合い、またおそらく信頼し合うことを可能にするという点においても、重要である<sup>(34)</sup>」。このことは、電信電話・テレックス・ファクシミリ等の高度通信情報システムが発達した今日においても、一層の重要な役割を増している。クラークは、「重要人物の密接な個人的接触に対するシティーの必要は、けっして弱められてはならない（むしろ逆である。）……迅速な決定、個人的な結束が一さらに望むべくは専門知識と世界的接触が一平方マイルのなかにしっかりと根をおろしたままになるであろう<sup>(35)</sup>。」次に、時差の点からみて、ロンドン、東京とは九時間の差があり（夏時間の時は八時間）、ニューヨークとは五時間。朝出勤して来ると、まずホンコン・シンガポール・東京と連絡し、次に、欧州大陸・中東・アフリカなどを相手に商売し、午後に入るとニューヨ

ークと連絡できる，という点では世界をまたにかけて商売が楽にできるという好都合な位置にある。ちなみに，東京の場合，朝の九時にニューヨークと連絡をとる場合，夜の十時まで働かなければならない，ということになる。神戸正雄氏は，「ロンドンが，外国為替及び有価証券の売買につき有利なのは，東部諸地域（ベルリン，パリ，セントペテルスブルグ）の市場が閉じる前に，それら地域の状況を知って，これに向って対策を講ずることができ，また，これら市場が，閉じたる後，ロンドン自身の市場の開かれている間に，西の方ニューヨークに向って働きかけるに十分なる時間を有するのである。これらの点においてニューヨークは到底ロンドンに及ばない<sup>(36)</sup>。」と述べている。次に，島国であるか，ユーラシア大陸の一部に位置するかという地勢については，外国からの侵入・介入・攻撃・干渉を受けにくいという点で，諸外国より海で隔たれているということは，安全であり，実際の上での貢献度はともかく，心理的感覚として安心感が存在するということは，その国の政治的安定をも促し，諸外国からの信認も増すことになろう。次に，気候・風土・交通の便の良否が問題となる。気候は，温暖であることが望ましく，海上交通・航空路として世界の主要な都市となっていなければならない。厳しい気候のため，交通が頻繁に途絶するようでは地理的条件は良くない。次に，言語について，世界で最も普及し，ビジネス用語として利用されている言語として英語が母国語として位置する中心国は，国際間の巨額にのぼる各種取引きを瞬時に，電信電話を通じて行なわれることが一般的のため，言語上のミスは決して許されるものでなく，また，先に発達した国々が欧米であったという歴史的経緯からも西欧的取引習慣を身につける技術的側面での熟練と精通の会得の難易さに，生まれ育った地理的条件が中心国の発展の条件に大きく影響するであろう。

#### 8 中心国の国民性について

国際信用機構の中心国は，他のいかなる国からも絶対的信頼のもとに，ブラウンが指摘するように，周辺国による国際決済に必要とする資金を，ロンドン残高として保持し，預金強制力（deposits-compelling power）を強め，イングランド銀行によるバンク・レート政策の助けと共に，ポンドの需給関係の安定に大

いに役立った。エビットは、「英国の国民気質によって、英国の貿易商や銀行は、正直さと取引上の公正さについての信用を勝ち得た。そしてついに英国や他国のあまり有名でない同業者に代わって、英国の銀行や大商社がその名義を貸して手形の上に出すことを要求されるようになり、かくて支払手段としてのポンド手形の使用が国際的になったのである<sup>(37)</sup>。」すなわち、イギリス人が自国経済の発展のためにも、国際経済の継続的発展のためにも、進んで自国との取引関係に伴う対象ばかりでなく、第三国への積極的信用の供与や、外国に投資をした。ジョアン・ロビンソンが主張するごとく、「所得勘定の収支尻が順調になっている国は長期にわたって均衡を得た利子率で多少とも対外貸付を行わねばならないということ、もしくはそのかわりに、その民間および政府が対外貸付を準備していない国は所得勘定に受取超過額をもってはならないということである。この喰違いが些細な一時的のものならば貿易収支と貸付利率の歩調がうまく合わなくとも、金および短期資金の流出入活動によって円滑にやっけてゆくことができる。しかし龍大な継続的収支不均衡はこの制度には耐えがたい緊張をもたらすのである<sup>(38)</sup>。」であった。貿易の繁榮には、積極的な金融措置が必要であり、国際資本市場における支配的な位置が戦前のイギリスを中心国にならしめたとも言える。この点、アメリカのような国内に広大な国土を保有し、十分な投資機会に恵まれている場合、対外的投資よりも国内への開発を優先させる機会が多いことは、中心国としての条件をイギリスに一步譲ることになる。

また、外国人より絶大な信頼を受けるには、国際経済における突発的事件・事故に対して、中心国が容易にその信頼を裏切るような政策をとらないという信認の有無の大きさがある。いわゆる第一次世界大戦中、イギリスがあくまで金兌換の停止をしなかったこと、最近ではアルゼンチンとのフォークランド諸島（マルチナス諸島）の領有権問題で、戦争にまで発展した際にも、預金封鎖の措置をとることもなかった。このような過去からの信頼が、中心国への在外資金の保有を促し、長短資金の調達、運用の場所として、諸外国より選択されることになる。

以上、ここにおいては、世界の金融中心地は、世界の銀行の役割を意味し、外国の資金を預かったり、運用したりするに当って、外国人に安心感を与え、信用を受けるに値いする誠実さ、綿密さが要求され、なおかつ対外的に積極的な資金の配分を行なう精神に富み、かつ、いかなる政治的・経済的情勢の変革にも信頼を裏切ることのない信義を重んじる国民性が大切と言えよう。

米国人と欧州人との気質の違いについて、田尻嗣夫氏は「現在シチーにおける商品取引の参加者は、生産・消費・加工・流通など、なんらかの形でその商品に関係した人たちが約八割を占め、全く無縁の投機筋は二割程度にすぎないのに対し、シカゴやニューヨークではこれが逆の比率になっている<sup>(39)</sup>。」と指摘し、欧州人の保守性と米国人の革新性に起因する違いを述べているが、どちらの気質が外国人に選ばれるか、論を待たないところである。

## 9 通貨の問題

いかなる通貨が国際通貨として利用され得るか、という問題については、多くの著書が示すように、金が本来唯一の世界で普遍的に流通する国際通貨であると考えられる。しかしながら、第一次大戦前のポンド体制から今日に至るまでの国際金融機構は、世界のある特定な国の通貨を、信用貨幣として国際間で広く利用してきた。このことについてどのような資格・条件を充足することで特定国の信用通貨が国際通貨として金に代用されることを可能にしたか、を考慮するとき、それは、中心国の資格・条件を明らかにする課題と重複することになる。すなわち、諸外国からの絶対的信頼を背景に中心国通貨が流通することは、絶対的信頼の中身を明確にすることであり、同じこととなる。従って、ここにおいてはできるだけ重複する部分については触れないで、言及する。

まず第一に、歴史的経緯を回顧し、いかなる通貨が国際通貨として利用されてきたかを追求する方法がある。これについては、ここでこれまで記述してきた中心国の諸条件を除くと、それは金との結びつきの大小・完全さでの程度についての追求となり、特に1971年8月の金とドルの交換停止以降については、それ以前の金の結びつきが存在していた時代のそれとの関係で、大きな国際通貨論争として注目される事柄である。

第二に、貨幣の機能に焦点を当て、いかなる諸条件を満たすことが国際間の基準通貨として、取引通貨（交換・支払手段）として、準備通貨として、介入通貨としての機能を十分に果し得るのか否かを検討する方法である。ここで一番問題となるのは、貨幣の貯蔵機能として信用通貨の準備資産としての条件を満たすには、金との結びつきを必然とするか否かに至る。このことは、信用貨幣が究極的には金との結びつきの絶対性を議論するものである。しかしながら、国際信用通貨は、一般的には手形・小切手・支払指図書・銀行券・铸貨が広く流通されており、その国際間の取引の大部分が銀行券・铸貨を除くそれ以外の方法が大勢を示めている現実をみて、為替による方法がずっと続くならば、堀江薫雄氏が指摘する如く、「各国は最終決済を必要とせず、国際決済の観点からすれば、最終決済の完了しない中間段階が継続的に続き、為替を保有する国は、名宛国に対する請求する権利を債権として保有することになる<sup>(40)</sup>」。このことは、準備資産を金に結びつける必要性の有無として、国際通貨の機能に準備機能を入れる必要がなく、それが国際間での受領性 (Liquidability) さえあれば良い、という主張にも発展する。しかしながら、これについては、普遍的受領性をもたせるためには、金への結びつきを根本条件とする意見があるならば、対抗できない。結局、第二の方法も究極的には国際信用通貨の流通根拠を金への結びつきの有無の議論に就着することになる。

第三の方法は、貨幣を保有する動機からの追求・分析である。これに、J・M・ケインズの取引動機と予備的動機、そして投機的動機の3つからの追求となる。松村善太郎氏によれば、「通貨ブロックの規模と活動が世界的範囲に及ぶかぎり、その中心国通貨はあたかも国際通貨のような外観を呈して流通する。しかしながらこのような場合にも、金と交換性のない通貨が十分果たしうる機能はせいぜい取引動機に限られ、貯蓄預金 (saving deposit) の形態をとる予備的動機は、貨幣価値の安定について保証のない軟貨では十分に満足させることはできない。……しかしながら予備的動機にもとづく貨幣保有は、不時の支出、予測の困難な有利な購入、確定債務の決済に必要である以上、軟貨圏においても、各国は中心国市場に、取引動機にもとづく貨幣保有のほかに、予備的動機に応



ずる貨幣をある程度保有しなければならない。これに反し、投機的動機にもとづく貨幣需要は、軟貨圏の中心市場ではほとんど存在しないといっても過言ではない。……これに対し、第二次大戦後の米ドルは一定比率の金兌換が保証されるかぎり、金と同様に一般的交換手段、価値貯蔵の手段となりえたのであって、各国はドルをもつことによって取引動機、予備的動機のみならず、投機的動機を満たすことができた<sup>(41)</sup>。」としている。ここでも究極的には保有動機の3つの総てを満たすためには、特に投機的動機に対する貨幣保有動機は元本の確実性か、利子配当金が先かの選択の問題になるかもしれない。これらも金への信用通貨の結びつきへの議論に帰着する。

以上、一．歴史的経緯の回顧から、二．貨幣の機能の面から、三．貨幣の保有動機からそれぞれ国際通貨を考えてみると、究極的には金への結びつきに帰着することになる。そこでここでは、国際通貨の流通根拠を次のように分類し、考えてみたいと思う。

1. 金への直接・間接的・絶対的結びつきを必要とする考え方、
2. 金への結びつきはある方が望ましいとしても、絶対的必要条件ではないという考え方、
3. 金の結びつきは不要とする考え方、

まず第1については、小野朝男氏は、「流通の条件として確実に金に兌換されることを要する。その条件がなければ、それは流通しない。まさにその意味で、この外国為替の流通の背後には、常に金の流通がかくされている<sup>(42)</sup>。」とし、また梶山武雄氏は、「国際通貨は本来、交換可能通貨である。もっとも、直接に金と交換される典型的交換可能通貨であることをかならずしも必要としない。金と直結している通貨と交換されうる通貨の場合もあり、より広義に解釈すれば相互に交換可能な場合を意味することもある。……これまでアメリカ・ドルが国際通貨ないし国際主軸通貨として国際通貨の役割を果たしてきたのは、膨大な金を背景として、金と直結していたこと<sup>(43)</sup>。」と金との結びつきを強調する。さらに、今宮謙二氏は、「金の自由鑄造、自由溶解、自由輸出入、自由兌換が私人、通貨当局を問わず無条件で行なわれることをもって根本条件とし、



そうでなければ信用通貨でもなければ国際通貨でもない<sup>(44)</sup>。」と述べている。また、加瀬正一氏は、第一次大戦前のポンド本位制に言及し、「各国がポンドを利用しようとするのは、単なる便宜のためでなく、その価値に信頼をおいて、安心して利用できるためです。ポンドがこのように価格の安定度を世界的に誇示しえた理由を、イギリスはじめ各国が国内的にも金本位制を採用し、金の国際間の自由な移動を通じ、国際的景気調整が働き、国際均衡が保たれたため、イギリスとしてはわずかの名目的金準備をもってポンドの無制限な金交換を保証し、その価値の安定を世界に誇示することができたわけです。また、国内均衡と国際均衡をうまく保つために、中心国の圧倒的優位がそれを助けた<sup>(45)</sup>。」とし、究極的には金の結びつきがポンドの安定を導いた根本的要因としている。また、松村善太郎氏は、「国際取引においても取引動機と予備的動機 ( $M_1$ ) と投機的動機 ( $M_2$ ) の両機能を十分に果たすことのできる通貨が、完全な国際通貨としての資格をもつことになる。貨幣が一般的交換手段として機能するならば、 $M_1$  的動機、なにかんづく取引動機のための貨幣保有は可能となるけれど、 $M_2$  的動機は富の貯蔵の機能を果たす貨幣でなければ満たされない<sup>(46)</sup>。」としている。さらに小野朝男氏は、「信用通貨が信用通貨であるためには、信用が確実であり、その現実の貨幣たる金銀への兌換が保証されていなければならない。でなければ、それは互いに授受すべき貨幣額の相殺の手段に利用されないし、また現実の貨幣に代わって流通することもありえない。このことは、国際間においても変わりがない。外国為替が国際間の信用通貨として、互いに授受すべき貨幣額の相殺の手段に利用され、国際間を流通するのは、これら外国為替の現実の貨幣たる金銀への兌換が絶対に保証されているからであり、その限りにおいてである。その保証がなんらかの形でくずれるならば、それらは、そのとたん、もはやいかなる意味においても、信用通貨ではなくなる。それらの国際信用通貨としての流通は完全にとだえる<sup>(47)</sup>。」とし、以上いずれも、金との結びつきを絶対的必要条件としている。

次に、金との結びつきをある方が望ましいが、絶対必要条件ではない、または、不要であるという主張を挙げる酒井一夫氏は、「ポンドやドルは、単に金

債務だから国際通貨たり得たのではない。ポンド・ドルなどは巨額な相殺機構に立脚し、そのための金融中心地を抱えていたから国際通貨たり得たのである。その背後に世界貿易における主導権や国際的貸付資本の蓄積があったことは繰返すまでもない<sup>(48)</sup>。」としている。次に岩野茂道氏は、「信用貨幣の本質を手形、すなわち債権債務の相殺関係として把握し、現代銀行券が手形流通にもとづいて発行されるかぎりにおいて、現身の金は不要であり、かかる不換銀行券流通の根拠はたんに国内貨幣領域のみならず国際領域でも生きている<sup>(49)</sup>。」と述べている。

これら金との国際信用通貨の結びつきについて、1971年8月の金とドルの交換停止以降もドルは国際間の取引通貨として、基準通貨として、諸外国による準備通貨として、また、為替市場への介入通貨として圧倒的な支持を得ている現実を、どう考えているのかをみると、三宅義夫氏は、「一定量の金とのひきかえを事実上やめていてもドルがなお準備通貨として機能しえているのは、ひとえに、諸外国通貨当局がドルの金との交換を要求しないでいる国際協力のおかげである<sup>(50)</sup>。」としている。また、梶山武雄氏は、「従来ドルは観念的にもかつ現実的にも金と連結していたのであるが、今日においては、対外的公的金兌換は停止したが、観念的には金と結びついているということである。……しかし、厳密に言えば観念的ばかりでなく現実的にも金に結びついていなければならないから、そういう意味からすれば、兌換が停止されているかぎり、本来の意味の国際通貨でなく、混乱ないし混迷の中に国際通貨は置かれているといわねばならない。いいかえれば、本質的には国際通貨でないものが国際通貨として使用されているというのが現状である。すなわち、日常の決済手段として、また介入通貨として機能しえても、価値保蔵のための準備資産としては究極的には機能しえないからである。どれか一つないし二つの機能を営みうることをもって国際通貨と規定すれば、いかにも国際通貨といえようが、厳密に言えば国際通貨ということはできないことになる<sup>(51)</sup>。」としている。

以上のように、第一次大戦前のポンド体制から IMF 体制の崩壊以降の現在に至るまでの国際金融機構は、ポンドまたはドルを国際通貨とする国際信用機

構であった。国際信用機構が信用通貨・ポンド・ドルを使用し、円滑に運営されてきたその根本的原因を、通貨が金に兌換しうる、—中心国通貨＝信用通貨＝金への兌換—ということであったのかどうか最大の論争点となろう。中心国の信用通貨が金への兌換がなくても中心国の経済的絶対優位を背景に中心国通貨の価値への信頼が絶対であるならば、これまで述べてきたような中心国の資格・条件を満たせば、何ら金への兌換を保証することなく国際通貨として、大いに利用されるのではないか、という疑問が生じてならない。しかしながら、これについては国際通貨論争としてこれまでに著名な学者の間で長きに渡って議論されてきた問題であり、ここで早計に結論を出すことは控えるべきであるとする。従ってここでは、以上のような議論を紹介するにとどめておく。

#### 引用文献

- (1) H. Magdoff, *The Age of Imperialism*, Monthly Review Press, 1969, p.83.  
H. マクドフ 小原敬士訳「現代の帝国主義」岩波書店, 1969, p. 95.
- (2) W.M. Clarke; *London as a World Financial Center*  
W.M. クラーク 山中豊国訳「シティーと世界経済」東洋経済新報社, 昭和50年, p. 207.
- (3) H. Magdoff, *op. cit.*, p. 80.  
H. マクドフ 小原敬士訳, 前掲書, p. 91.
- (4) H.E. Evitt, *A Manual of Foreign Exchange*, Sir Isaac Pitman & Sons, Ltd., 1960, p. 47.  
H.E. エビット「外国為替入門」東京銀行調査部訳, 東洋経済新報社, 昭和42年, p. 55.
- (5) W.M. Clarke, *op. cit.*,  
W.M. クラーク 山中豊国訳, 前掲書, p. 206.
- (6) W.M. Brown, *The International Gold Standard Reinterpreted 1914-1934*, AMS Press 1970 Vol. 1 p. 535.
- (7) W.M. Clarke, *Inside the City*, George Allen and Unwin, Ltd., 1979 p. 241.  
W.M. クラーク 山中豊国・服部彰訳「現代の国際金融市場」文眞堂, 昭和60年, p. 268.
- (8) 加瀬正一「SDR の知識」日本経済新聞社, 昭和50年 p. 11.
- (9) 加瀬正一「国際金融市場の知識」日本経済新聞社, 昭和60年 p. 18.
- (10) H. Magdoff, *op. cit.*, p. 88.  
H. マクドフ 小原敬士訳, 前掲書, p. 100.
- (11) 大島 清「戦後世界の通貨体制」東大出版会, 1977 p. 5.
- (12) T. Balogh, *Unequal Partners*, 1963 Vol. II. p. 25.
- (13) H.E. Evitt, *op. cit.*, p. 48. H.E., エビット前掲書, p. 57.
- (14) 長 幸男「昭和恐慌」岩波書店, 1984, pp. 25~26.
- (15) H. Magdoff, *op. cit.*, p. 82.

- H. マクドフ 小原敬士訳, 前掲書, p. 93。
- 16 W.M. Clarke, op. cit.,  
W.M. クラーク 山中豊国訳, 前掲書, p. 206。
- 17 W.M. Clarke, ibid.,  
W.M. クラーク 同書, pp. 173-174。
- 18 W.M. Brown, op. cit., pp. 535-536。
- 19 W.M. Clarke, op. cit.,  
W.M. クラーク 山中豊国訳, pp. 6~7。
- 20 田尻嗣夫「ザ・シティー」日本経済新聞社, 昭和59年, p. 7。
- 21 佐久間潮, 打込茂子「アメリカの金融市場」東洋経済, 昭和59年, pp. 117~118。
- 22 吉野昌甫, 藤田正寛「国際金融論」有斐閣, 昭和54年 p. 109。
- 23 佐義光彦, 杉浦克巳「世界恐慌と国際金融」有斐閣, 昭和57年 p. 306。
- 24 W.M. Clarke, Inside the City, George Allen and Unwin, Ltd., 1979 p. 247, p. 250。  
W.M. クラーク 山中豊国, 服部彰訳「現代の国際金融市場」文眞堂, 昭和60年 p. 277。
- 25 田尻嗣夫, 前掲書, p. 10。
- 26 長幸男, 前掲書, pp. 26~27。
- 27 吉野昌甫, 藤田正寛, 前掲書, p. 123。
- 28 堀江薫雄, 「国際通貨基金の研究」岩波書店, 昭和43年, pp. 4~5。
- 29 Paul Einzig, The Destiny of the Dollar, Curtis Brown Ltd., 1972, pp. 128~129。  
ポール・アインツヒ, 石崎昭彦・中野広策訳「ドルの運命」東洋経済新報社, 昭和49年, pp. 165~167。
- 30 W.M. Clarke, London as a world Financial Center  
W.M. クラーク 山中豊国訳「シティーと世界経済」東洋経済新報社, 昭和50年 p. 6。  
田尻嗣夫, 前掲書, p. 14。
- 31 日本経済新聞, 昭和60年10月7日付。
- 32 同新聞, 同日報。
- 33 加瀬正一「国際金融問題を問く」有斐閣, 1984, p. 32。
- 34 W.M. Clarke, op. cit.,  
W.M. クラーク 山中豊国訳, 前掲書, p. 193。
- 35 W.M. Clarke, ibid.,  
W.M. クラーク 同書, p. 196。
- 36 神戸正雄「世界金融の中心としての倫敦の地位」京都大学経済論叢書, 1917, p. 115。
- 37 H.E. Evitt, op. cit., p. 47。  
H.E. エビット 前掲書, p. 56。
- 38 Seymour. E. Harris The New Economics' Alfred Knopf. 1948, p. 342。  
ジョアン, ロビンソン「新しい経済学」日本銀行調査局訳, 東洋経済第2巻 p. 143。
- 39 田尻嗣夫, 前掲書 p. 15。
- 40 堀江薫雄, 前掲書, p. 21。
- 41 松村善太郎, 「国際通貨ドルの研究」ダイヤモンド社, 昭和41年, p. 18。

- 42) 小野朝男,「国際通貨制度」ダイヤモンド社,昭和40年,p.90。
- 43) 梶山武雄,「国際金融」東洋経済新報社,昭和49年,pp.25~27。
- 44) 今宮謙二,「現代資本主義と国際通貨体制」汐文社,昭和47年 p.25。
- 45) 加瀬正一,「SDRの知識」日本経済新聞社,昭和50年,pp.12~14。
- 46) 松村善太郎,前掲書 p.16。
- 47) 小野朝男,前掲書, p.22。
- 48) 村野・松村編,「国際金融」有斐閣,昭和43年, p.24。
- 49) 岩野茂道,「経済評論」1973年1月号。
- 50) 三宅義夫,「国家通貨体制と円」青木書店,昭和46年, p.159。
- 51) 梶山武雄,前掲書 pp.28~29。
- 52) Milton friedman, the Case for Flexinle Exchange Rate, (Essays in sossitive Economics,) 1953 p.175。  
 フリードマンにては、投機的取引について、それが経済を不安定に導くのは、経済に内在する不安定要因に基づくものであり、均衡水準に達するまで、投機的取引等により資金の流出入が続くことが、経済を安定化に導くものである。と別の見方をしている。
- 53) 大島清,前掲書, pp.7-8。

### C. 周辺国の協力

国際金融の信用機構が円滑に運営されるためには、一．国際情勢の秩序と平和の継続であり、二．中心国が中心国として政治的・経済的・軍事的にも、絶対優位の立場を維持し、中心国は国際信用機構の維持・継続を守り、また、諸外国より信頼され得る地位を確保し、さらに、諸外国に対し中心国を利用することに伴う種々のファシリティを提供しなければならない。三．周辺国は国際信用秩序を乱すような行動をとることを極力抑制せねばならない。すなわち、国際信用機構を乱す要因は内乱・革命・地域紛争・戦争などは、論外であるにしても、投機的・逃避的取引による中心国からの資金の大幅な流出や、為替相場の激しい騰落や、証券・債券市場の激しい騰落は、信用機構の円滑な運営にとっては、大きな障害となろう<sup>(52)</sup>。大島清氏は、両対戦間の金為替本位制での論評で、「金為替本位制を広く各国が採用した結果、通貨当局の保有する外貨がふえ、この外貨はとうぜん通貨発行の準備となるとともに、一部は国際間を移動する短期資金となった。預金になったり投資されている外貨には利子

がつくので、現実にはこれがより高い利子を求めて移動する。本来の金にかわってこのような短期資金がつくり出されるところに、国際通貨制度として本来の金本位制との相違があるのである。事実、この短期資金の活動は相対的安定期には国際金融の調整に役立ったのであるが、同時にまた破綻の直接的な原因ともなった。すなわち、為替相場の変動をはげしくし、投機的な短期資金の動きを活発にし、国際金融の混乱を招く結果となった<sup>(53)</sup>。」このことは、一国の銀行制度において、個人・企業が銀行へ預金や運転資金の運用のため残高を増やせば増やすほど、銀行の信用創造能力は拡大し、借り手は借り易くなることで経済の活性に大いに貢献する一方、預金者の一斉の預金取付けは、銀行の破綻を必至にするのと同じことであり、周辺国（諸外国）が中心国通貨建てによる信用手段で、国際間の決済貸借を行ない、余資は、中心国から流出させることなく運転資金として、運用資産として、中心国に在外資金の形で保有することが国際金融不安・金融危機・為替相場の乱高下を防ぐための協力に必要であると考えらる。

### あ と が き

世界のある特定国が、国際金融の信用機構の中心国となり、その国の通貨を国際通貨として広範囲にわたり利用されるための中心国の資格・条件を考察する時に、大きく分けて第一次大戦前の金本位制下のポンド本位制と两大戦間のポンド・ドル本位制、そして第二次世界大戦後の IMF 体制下のドル本位制について、それぞれ中心国の資格・条件について、同じように取り扱うことへの適否の問題が存在する。このことは、よく言う国際通貨論争での国際通貨の流通の根拠を、金へのリンクの有無への論争と重なるものであろう。このことは、中心国の通貨が金への結びつきの強さ、または、完全さの程度の違いにより、中心国の資格・条件にそれぞれどのような差異が存在するのかを明確にするものであろう。また、1971年8月のアメリカの金とドルの交換停止以降の中心国の資格・条件にどれほどの変遷があったかは、誠に興味ある課題である。すなわち、中心国が諸外国から、中心国の通貨を使い、中心国の金融市場で国



際間の取引の決済・貸借を行なうのに、中心国に対しどれほどの信認が低下したか、また、具体的にどのような場面でそのことを具現する現象が存在するかを明確にすることは大切である。また、イギリスの中心国に成り得た経緯は、産業革命を逸早く達成した世界市場での工業国としての優位さを背景に、中心国として台頭する経緯と、アメリカのそれは、両大戦を通じ、圧倒的な金保有国として、また、債権国としての地位を通じ、世界最大の資本輸出国として登場するものであった。クラークは、「ニューヨークが、有価証券の最大かつもっとも競争的な市場の提供においてとび抜けた位置を占めており、ロンドンはその重要性において問題なく第二位であることは明らかである<sup>(1)</sup>。」としている。

このように、中心国になった経緯の違いは、「ロンドンの運転資金は預金強制力 (deposits-compelling power) が存在し、ポンドの需給安定に大きな貢献をしている反面、アメリカのそれは TB が中心であり、預金強制力のない TB は、相対的高金利という預金勧誘力 (deposits-attracting power) によって、外国短資を引きつけるにすぎない<sup>(2)</sup>。」このように、中心国への台頭に至った経緯の違いは、両中心地の金融構造に違いを現わし、市場の運営に大きな相違を生じさせている。このような金との結びつきの大小・有無の違いによる中心国の資格・条件の違いや、金融構造の違いによる中心国の諸条件の相違を、慎重に検討することは重要な課題であるが、それ自体それぞれ大きな研究課題であるので、ここではあえて触れることなく、将来それらを検討するに当たっての基礎的研究としている。国際間の取引が拡大すればする程、国際間の依存関係は一層複雑になり、そこでの決済・貸借は、信用手段により信用機構を通じ行なう必然性は一層増すことが確実と思われる。このような状況の中で、中心国はいかに諸外国より信認を獲得し、他のいかなる国よりも、より多くの便宜を提供することが出来るか否かの一重にかかっている。このことは、もちろん絶対的なものでなく、相対的に他の国よりもより一層信頼が置かれるための条件を整えることと、他の国よりも多くの利用者への便宜を提供することにより、中心国として諸外国から信認を受けることになる。今後、これらの基礎的研究をもとに、

まえがきで示したような問題を一つ一つ検討していきたいと考えている。

- (1) W.M. Clarke; London as a World Financial Center

W.M. クラーク, 山中豊国訳「シティーと世界経済」東洋経済新報社, 昭和50年 p. 173。

- (2) 侘美光彦, 杉浦克巳「世界恐慌と国際金融」有斐閣, 昭和57年 p. 306。